

行くたび、**青森**
あたらしい。
A O M O R I

© 青森県観光連盟 2010

わたしの「津軽」

〜紀行文〜

優秀作品集



わたしの「津軽」～紀行文～
優秀作品集

はじめに……………	1
私の「津軽」俳句旅日記	
青森県青森市 太 田 直 樹……………	2
30年目の津軽紀行	
千葉県千葉市 吉 井 宵 平……………	7
「 聖地 津軽へ 」	
東京都文京区 須 田 由美子……………	31
私の「津軽」	
石川県金沢市 中 島 久 宜……………	45

はじめに

平成 21 年は、青森県を代表する作家「太宰治」の生誕 100 年に当たり、県内各地で生誕 100 年を記念する行事が行われました。

東青地域県民局では、これらの動きと呼応して、津軽半島への誘客促進を図るため、太宰の代表作『津軽』を題材とした、現代の「津軽」の旅推進事業を実施しました。

この事業の一環として、津軽を旅した思い出を綴った紀行文「私の『津軽』」を募集したところ、17 都道県、55 名から応募があり、審査の結果、津軽の旅の魅力をよく伝えている 4 作品を優秀作品として選考しました。

優秀作品は、太宰ゆかりの地の情景、自分の思い出との再会、地元の人との触れ合い、地元でも知られていない情報等、太宰の足跡を追う旅や現在の津軽の旅の楽しみ方を紹介しています。

ぜひ、この冊子をお読みになり、思い思いの津軽の旅を描きながら、この冊子を携えて、津軽を訪れることをお待ちしております。

平成 22 年 2 月



生誕 100 年祭 (H21. 6. 19)



弘前大学構内の文学碑 (H21 建立)

私の「津軽」俳句旅日記

青森県青森市 太田直樹

私は、太宰治が『津軽』を書くために帰郷した、同じ昭和 19 年の生まれです。

太宰の帰郷が、この年の 5 月、私は 8 月の生まれであり、太宰が津軽を歩いていた頃は云うまでもなく、母の胎内にいて、太宰はもとより、この世とも縁のない存在でした。

私と太宰作品との出会いは、高校 2 年生か 3 年生の頃であったと記憶しております。

当時の私の年齢で、太宰作品を理解できたのかどうかは定かではありませんが、『人間失格』『斜陽』『晩年』『グッド・バイ』などは、何故か重苦しい読後感が残ったことを覚えております。

それ以来、太宰作品を手にする事なく過ごして来ましたが、今年に入り「太宰治生誕百年」をテーマとした、フォーラムやイベントが始まり、私も、それらの太宰治フィーバーに触発され、ほぼ 50 年ぶりに太宰の本を手にしたのです。

当然のごとく『津軽』から読み始めましたが、ページを繰っていくうちに、「心のやすらぎ」とでも云えるようなものを感じ始めたのです。『人間失格』『斜陽』『グッド・バイ』も続けて読みましたが、『津軽』に感じた、「やすらぎ」のようなものが残ることはありませんでした。

この「やすらぎ」のようなものは、一体なんだろう、などと考えているうちに、太宰が歩いた『津軽』の旅を辿ってみれば、その理由が分かるかもしれない、と思い始めたのです。そうして、足の向くまま気の向くままオンボロ自転車に相棒に、文庫本『津軽』を傍らに、我が旅を始めることにしたのです。

太宰の『津軽』の旅は、「愛」と云う 1 科目を追及する旅であり、それをほぼ手中にして旅を終えたようです。それに倣えば、私の場合は『津軽』の中の「やすらぎ探しの旅」とでも云えるでしょうか。

幸いにも愚妻から「ねえ、どうして旅に出るの」などと云うシャレた言葉はなく、私も「苦しいからさ」などと、キザな言葉を吐くこともない、いたって気楽な旅の始まりとなりました。

夏帽や手に一冊の文庫本

1日目 平成21年7月12日(日)

斜陽館・芦野公園駅・芦野公園

午後1時斜陽館着。『津軽』の読後感が濃く残っているせいか、いささか緊張気味の入館となる。太宰が弟礼治と遊んだ米蔵、タケの昔噺を



斜陽館

聞きながら、ご飯を食べた文庫蔵の石段などに立ち、幼き日の太宰を偲ぶ。太宰が川端康成に出した、芥川賞受賞懇願の書簡、また佐藤春夫から届いた、芥川賞受賞の期待を抱かせるハガキなどには、胸がつまる。無頼派、破滅型、含蓄の人とも呼ばれる太宰ではあるが、ここ斜陽館に立ち、資料や遺品に触れてみて、あの屈折した心情も理解できるような気が

した。

芦野公園駅に移動。久留米餅を着て、両手に大きな風呂敷包みを持った若い娘さんと、美少年の駅員との、無声映画でも見るような『津軽』の、あの名場面を思い出す。

このような、心を和やかにさせる描写も、「やすらぎ」を感じさせる理由であろうか。

芦野公園に寄り、最近建てられた太宰像を見る。台座が高すぎて、表情がよく見えず残念。もし太宰が、自分のこの像を見る事があるとすれば、高い所におさまっている自分をそれこそ、「含羞の塊」となって見上げるに違いない。園内で飼われている鹿の寂しそうな眼に触れながら出口へ向かう。



太宰治像

含羞と道化は表裏桜桃忌

2日目 平成21年7月19日(日)

蟹田・観瀾山

午後N君の旧宅前を通り観瀾山に登る。

あの旅で、太宰が最も長く滞在したのが、蟹田町のN君宅であるが、彼が傍らにいる時の、太宰の寛いだ様子を読むと、N君と云う人に何故

か心を強く動かされる。太宰は、N君のことを「私は、この人を愛している」と書いており、N君がいなければ、太宰の人生は、もっと寂しいものであったに違いない。

あの日太宰は、桜の下の芝生で、N君につながる友人たちに、50年配の作家の悪口を語り聞かせるが、人をそしる自分を見つめ、哀しむように、自省しているのも、いかにも太宰らしい。

また、Sさん宅での、熱狂的接待ぶりを、ユーモラスに描いてはいるが、その一方で、このような接待ぶりは、自分の中にもあり、これが生粋の津軽人と、自嘲気味に書いており、自らを含めた、津軽人を見る目が物悲しい。

いささか感傷的になり観瀾山を下りる。

再会の互いにかかぐ夏帽子

3日目 平成21年7月26日(日)

今別・龍飛

午前10時本覚寺着。

酒に酔った太宰、N君、Mさんの3人が騒がしく訪れた場面を思い出す。

鯛をむき出しに掲げた太宰、酒に酔ったN君と大黒らしき人との会話などは、落語好きであったと云う太宰を彷彿とさせるところ。

外ヶ浜の潮風を背に受けながら、義経寺の石段を登る。

あの日、義経寺の石段の弁慶の足跡や、義経の馬の足跡をめぐって、太宰とN君が口ごもりながら交わす会話を思い出す。あの場面の、何とも云えぬ2人の表情を想像しながら義経寺を後にする。

午後2時旧奥谷旅館着。

太宰とN君が宿泊した部屋を見る。炉端に置かれた、2人分のお膳と6本の銚子がいかにも侘しい。酔って蛮声を張り上げて歌うN君、そのおかげでお膳を下げられ、泣き寝入りする太宰、翌朝寝床の中で聞く童女の手鞠唄にたまらなくなる太宰、ここの描写も『津軽』の名場面で、



観瀾山から見た蟹田



本覚寺

哀愁胸に迫るところ。

太宰の旅愁を思いつつ龍飛岬へ向かう（向う）。

北の辺の初夏あけばのの手鞠唄

4日目 平成21年8月9日(日)

深浦・鱒ヶ沢

昼過ぎ深浦へ入る。太宰は『津軽』の中で深浦の雰囲気「この辺から、何だか、津軽ではないような気がするのである」と表現しているが、ゆったりとした街のたたずまいは、同じ海沿いの街ながら、外ヶ浜辺りとは随分違うような印象である。太宰が宿泊した旧秋田屋旅館へ行き、展示資料を見る。新たに発見された、佐藤春夫宛の11枚続きのハガキ数枚には、お金のこと芥川賞のことなどが記されており、苦境にいた太宰を思わずにはいられない。東京にいる子供を思い出しては、たまらなくなり、旅館の主人のもてなしには、兄たちの勢力をおもい知らされる太宰、深浦の旅は、街の印象とは違い、旅愁だけではなく、辛いものが残る旅であったに違いない。



ふかうら文学館（旧秋田屋旅館）

午後3時鱒ヶ沢着。

太宰は鱒ヶ沢に対して、妙によどんで甘酸っぱい街、と描きながらも、「君たちの故土を汚すほどの権威も何も持っていないので、軽く笑って見のがしてほしい」と言い訳するくだりなどは、いかにも「気遣いの太宰」らしく微笑ましい。

太宰と並んで歩いたような気がする、今日の深浦と鱒ヶ沢の街、そんな不思議な思いを胸に温めつつ、暮れ初めた鱒ヶ沢を離れた。

はまなすや斜陽に深む旅うれひ

5日目 平成21年8月23日(日)

小泊・再会公園

私の『津軽』に刺激されて始まった旅日記も、いよいよ最終日となった。

『津軽』のクライマックスとでも云うべき太宰とタケとの再会の場面を思い浮かべつつ小泊へ向かう。

午後、2人が再会した運動場を見下ろす再会公園に到着。「小説『津軽』の像」の2人が、心なしか寂しそうである。

ふいに、タケを探して、掛け小屋を回り歩く太宰の姿が目には浮かび、胸が熱くなる。

再会の緊張で、肩に波を打たせ、深い長い溜息をもらすタケ、無遠慮に質問を發するタケに、「ああ、私はタケに似ている」と自分を見つめる太宰、「私には何の不満もない……胸中に一つも思う事が無かつた……私はこの時、生れてはじめて心の平和を体験したと言ってもよい……」無憂無風の情態の中で、太宰がタケに感じた愛おしさと母性、否太宰はこの時、まぎれもなき「母」を見たに違いない。

再会公園からわずかに望まれる小泊の海、運動場の向こうの万緑の山々を眺め、全身に広がる「やすらぎ」に浸りつつ、『津軽』を辿る私の旅を終えた。

八月や旅の終わりのごとき日々



小説「津軽」の像

30年目の津軽紀行

千葉県千葉市 吉井 宵平

津軽へ

今年の8月、津軽への旅を思い立った。

津軽は「太宰治生誕百年」ということで沸きだっているらしかった。太宰治は「或るとしの春、私は、生れてはじめて本州北端、津軽半島を凡そ三週間ほどかかって一周した」が、私の方の旅は、せいぜい3泊4日である。会社勤めの休暇は短いのである。

「今年の旅行のテーマは太宰にしよう」

「へえ」と言うのは妻である。妻は太宰に格別興味が無い。

「僕が学生時代、北海道へ行った時のアルバムがあるから、持って来てくれよ」

そのアルバムには、20歳の私が、芦野公園で一人で写っている写真があるのだ。阿部合成作の文学碑の前で、頬がこけ、安物のサングラスをかけ、左手指に煙草を挟み、首を少し左に傾け、あれは確か9月の中ごろで、暑かったのだろう、長袖のシャツをまくり、胸元のボタンを2つほどはずしている。碑を取り囲む柵に腰を乗せて、一人旅の私は、そんなポーズを取り誰かにシャッターを押してもらったのだ。



芦野公園太宰治文学碑

後ろには黄金の不死鳥、苦しい現実の狭き門をあらわすという格子があり、そして、

撰ばれてあることの

恍惚と不安と

二つわれにあり

20歳の私はおそらく、そんな気分で、写真に収まっているのだろう。中学卒業の春に『人間失格』を読んで以来、高校時代は新潮社の文庫本を読み漁り、唯ひとり好きな作家であった。そして大学に入りアルバイトをして筑摩書房の全集を買った。

それから30年余り経つ。30年経ったが、自分は撰ばれてあるわけではないことをとくに知り、恍惚と不安と2つのうち自分の人生には恍惚など無いことを知り、妻1人子2人の格別語るべきものも無い家庭で平凡に暮らしている。

「格好いいだろう、この写真」

「そうねえ（苦笑）、格好いいわよ」

「なんだい、それ」

もう 1 枚、斜陽館の写真がある。道を挟み右斜めから全景を撮った、よく見るアングルのものだ。津軽の写真は、この 2 枚きりである。夜行列車で朝青森に着き、青函連絡船の時間を気にしながら駆け足で金木と芦野公園だけ行ってきました、という雰囲気だ。アルバムの写真はすぐに北海道に変わっている。

太宰治生誕百年。彼がたけさんと再会したのは確か 30 年ぶりだった。私も 30 年ぶりに芦野公園へ行き、あの碑の前で、もう一度同じポーズで写真を撮ってみたい。もしかすると当時の自分の想いが蘇ってくるかもしれない。あの時は一人旅だったが、今度は妻と 2 人である。都合のいいことに、彼女は最近一眼レフカメラを購入し、写真講座などに通ったりしている。妻に写真を撮ってもらおう、遠慮はいらないのだ。

太宰の帰郷の軌跡を辿る旅は、気障な言い方をすれば、私の青春を今一度噛み締める旅にもなるだろう。そして『津軽』に登場する人々や土地、場所を直になぞってみることで新しい発見もあるに違いない。私も人並みに人生を生きてきて、年を重ね、いつの間にか半世紀以上になる。太宰やその長兄、中村さん、北さん、中畑さん、そしてたけさん。いつの間にかそれらの人々に久闊を叙する積もりになっている自分に気づく。まあいい。あのときの自分に、そしてご無沙汰していた人達に会いに行こう。津軽は、何しろ沸きたっているに違いない。きっと楽しい旅になることだろう。

「ねえ、三脚も持って行こうかしら」

妻がいう。どうやらカメラマンに徹してくれそうだ。

龍飛まで

青森初日の前夜は浅虫温泉に泊まったが、今日はアスパムの前にあるレンタカー会社で車を借り、国道 280 号線を北へ行く。外ヶ浜を巡り、龍飛まで行こうという計画である。私と妻の津軽の旅が始まる。

「とりあえず右折して、ベイブリッジに出たら渡ってください」

というレンタカー会社の人の指示に従い、すぐに 280 号線に出ることができた。この道を海岸伝いに北へ北へと行けばやがて蟹田だ。その先平館を通過して今別、三厩と経由してやがて龍飛に至る。そこまでが旅の目的だが、今晚の宿は大鱈温泉なので、すぐに弘前まで戻りそこで車を返

却し、鉄道で移動しなくてはならない。半島往復、結構な距離を走ることになるだろう。知らない土地でハンドルを握るのも少し緊張するが、処々寄り道しながら行くのが目的でもあり、急がずに旅を楽しまなければ損とアクセルも緩めである。

「ほら、気をつけてね」

助手席から言わずもがなの声がする。

梅雨明けもせぬうちに 8 月のお盆も過ぎてしまった東北地方だが、今週に入って俄然天候は安定、遅まきながら夏らしい陽光が照りつけまことに気持ちがよく、心浮き立つ。

青森湾は鏡のように平らかで、波ひとつ無い。海辺の道を快適に走っていると妻が、

「実家のあたりの景色とよく似ているわ」

と言う。彼女の実家は千葉県の九十九里海岸の南端近くにある。どこが似ているのかと聞くと、

「家が低くて、周りに高い建物も無いし、塀も低いでしょ。そんな家が路に沿って続いているのよ」

海辺の部落はみんな似ている。房総の海辺の町並ともよく似ていた。

青森を出て 1 時間も経ったろうか。車は蟹田に入った。「この外ヶ浜一帯は、津軽地方に於いて、最も古い歴史の存するところなのである。そうして蟹田町は、その外ヶ浜に於いて最も大きい部落なのだ」

蟹田には、太宰の青森中学時代からの親友、中村貞次郎さんがいる。太宰はその中村さん宅に数日滞在し、その間町外れにある観瀾山でお花見もしたが、そこには中村さんの尽力により昭和 31 年に文学碑が建てられている。



太宰治文学碑

蟹田川を渡り、町の外れに至ると観瀾山の入り口があった。木製の案内板があり、現在地と記された赤い文字のすぐ近くに「太宰治文学碑」とある。

日照りの階段を上っていくと、大きな松の先に碑があった。そこは町に向かって一寸張り出しており、樹木のさえぎることも無く蟹田の町と海が一望できる場所だ。この場

所を選んだのは中村さんに違いない。

「その山は、蟹田の町はずれにあって、高さが百メートルも無いほどの小山なのである。けれども、この山からの見はらしは、悪くなかった」というとおり、向こうの山並みとこちらの観瀾山に挟まれた蟹田の町、それから左手に広がる海がまるで風景画のようだ。

眼下には立派なフェリー港があり、出港したばかりの船が長閑な海にぼつんと浮かんでいた。蟹田と下北半島の脇野沢間を 60 分で結ぶ、総トン数 61 トンのかもしか丸であろう。太宰は中村さんとここから龍飛まで船で行こうとしたが、その日は荒天のため欠航となりバスで北上したと書いている。今はその連絡船はない。

そんな景色を見下ろす山に、碑がある。

「かれは 人を喜ばせるのが 何よりも好きであった！」

と、碑に刻まれている。私達は碑の脇に立ち互いに写真に収まり、蟹田の町の景色を胸に吸い込んで山を降りた。

車を発進させ、再び国道を北上する。

「あの文学碑の言葉なんだけど」と妻が言う。カメラの画面を見ながら「かれは人を喜ばせるのが何よりも好きであった、て蟹田と何か関係があるの」

その言葉自体は太宰の作品中のものであり私は疑問を感じなかったが、蟹田との関係性などと、そう言われてみれば少し物足りない気持ちもしてくる。

「誰か僕の墓碑に、次のような一句をきざんでくれる人はいないか。

かれは、人を喜ばせるのが、何よりも好きであった！」

『正義と微笑』の中の言葉だ。

「お花見の後、どうしたのだった」

妻は『津軽』のページを繰りながら、「お花見の後旅館で飲みなおそうとなって、その後更にSさんの家へ移動して、Sさんが熱狂的な接待をする場面になるわ」

ああ、あのところだ、と頭の中に情景が浮かんでくる。妻が言うように、何故あの言葉がこの町の碑に刻まれたのだろうか。蟹田は、津軽の旅を共にする少年時代からの親友、中村さんの住む所であり、



文学碑文

おそらくそれ故小説の中でも1章を割くほど重要な、意味ある場所などだ。もっと町に所縁のある言葉のほうが判りやすいじゃないか。例えば、観瀾山については随分と語っているし褒めてもいる。

観瀾山でのお花見の後、席を変えE旅館で飲みなおし、そこからSさんの家へ行くことになる。そしてSさんの家へ行って、「津軽人の本性を暴露した熱狂的な接待振り」に太宰はすっかり面食らうのであったが、「この疾風怒濤の如き接待」は津軽人の愛情表現であるとし、「ちぎっては投げ、むしっては投げ、取っては投げ、果ては自分の命までも、という愛情の表現」について「私自身の宿命を知らされたような気がして」と告白しているのだ。中村さんとの旅の間も、そんな津軽人の業のようなものについて語り合ったに違いない。いやこれは私の勝手な想像であるが、Sさんの家での出来事は誇張であり、戯画化されたSさんの姿は、実は太宰自身なのではないか。Sさんのような太宰の姿を、中村さんもよく知っていただろうし、揮毫した佐藤春夫やこの言葉を選んだ井伏鱒二も、在りし日の弟子の姿を中村さんの述懐に重ね合わせ、もっともふさわしいとしてこの言葉を選んだのではないか。

一見蟹田の町とは何の関係もない言葉が選ばれた背景に、こんな物語を読むのは勝手とお叱りを受けるかもしれないが、この碑が中村さんの尽力によってできたものであり、5人でお花見をした場所が選ばれているのであるから、文学碑誕生の秘話を自分勝手に思い描いてみると、私の心にもストーンと落ちるのだ。小説の中の台詞のような言葉も、俄然身近なものになってくる。

「そういうことでいいんじゃないか」

私は得したような気分で、思わずにんまりとして独り言のように呟いたが、その声は助手席にまで届かなかっただけだ。妻は、

「え」

と、言いながらデジカメでもう違う写真を見ていた。

さて、太宰は蟹田で中村さん宅に3泊し4日目の朝、2人連れ立って龍飛へと向かうのだったが、船でまっすぐ行こうとしたところ強風のため連絡船が欠航となり、バスで今別のMさん方を目指すことになる。

一方、私達のドライブは快適至極だ。やがて平館である。この道は樹齢300年を超える黒松並木が続く松前街道というのだそう。松前藩が参勤交代の折この街道を通ったことからそう呼ばれている。その街道の、役場入り口の標識のところに、「不老不死温泉」とあった。不老不死温泉といえば、日本海側の黄金崎ではないか。今回の旅では日程が厳しく足を伸ばせなかったのだが、津軽半島の西海岸にあるものが、どうしてこ

こ東海岸にあるのだろう。

ちょっと寄ってみようと左折していくと、左手に学校らしき運動場の塀が続きもう少し行った先の右手に、平屋建ての、公民館のような建物があった。「平館温泉 不老不死温泉 憩の宿」という看板がある。

車を降りて玄関の方へ歩いて行くと、女将さんらしい人が荷物の搬入をしている。

「立寄り湯したいのですが」

「いいですよ、どうぞ」

玄関に入り、受付に回った女将さんに料金 400 円を払う。私は気になっていることを聞いてみた。

「あのう、不老不死温泉で黄金崎にありますよね。あそこは関係あるのですか」

「うちのほうが元祖です」

女将さんは、小さい声ながらにこりともせず、さりげなく言った。その口調からは、もう何度も同じ質問を私のような旅行者から発せられ、元祖の面目丸つぶれ、とでも言いたげな微かな苛立ちのこもった溜息さえ感ぜられ、私としてはそれ以上聞くことが憚られたので、パンフレットを頂き、妻は待合室で雑誌でも読んで待っているというので、そのまま脱衣所に入って行った。

一人真昼の温泉にちゃぽんと浸かり、やや硫黄の香りのする硫酸塩泉、源泉は 1.5 km 離れた処にあるので加温しています、という注意書きがあり、窓の向こうは中学校が見えた。この時間は宿の中は無人らしく、しんと静まり返っている。浴槽から溢れる、不老不死のお湯を独占しているなんて、夏の温泉もいいものだった。

あまり温まりすぎても困るので適当に切り上げ、自動販売機のジュースを飲みながら、何かお土産でもと思ったが、売り場が見つからず、「じゃ、行こうか」

「お世話様でした」

「はあい」

女将さんは姿を見せず、隣の部屋から声が聞こえた。ちらと覗くと孫らしき男の子とおじいさんと 3 人で遊んでいた。

貰ったパンフレットには立寄りは午後 1 時からで、料金は 500 円となっていた。案外親切に、気を遣ってくれたのかもしれない、と思った。

時刻は 11 時半になっていた。昼食は龍飛で景色を見ながら、と妻と相談していたのだが、予定外の温泉に入ったり見晴らしのいい場所で写真を撮ったりしたせいで、このままでは午後もかなり遅くの到着になり

そうだ。食事ができる適当なお店を見つけるのも難しそうなので、最初に見つけたコンビニでおにぎりやサンドイッチを買い、海辺で食べようということにした。

不老ふ死温泉を過ぎると雲が少し暗くなってきた。平館海峡を後ろに見ながら道は今別方面へと大きく左に回り込む。やがて小さな漁港に差し掛かりその漁港が尽きるところの山間に義経寺があった。太宰と中村さんが今別から三厩まで歩く途中に立ち寄っている。2人山を登ると古ぼけた堂屋があり、その扉には笹竜胆の源家の紋がついていたという。



義経寺遠景

寺に至る山道は、下から見上げるとジグザグと3度ほど折れ曲がり、小高い中腹へと消えていた。勾配はかなりある。しかし階段がきれいに整えられ白く塗られた鉄柵もあり、たいした苦労もなく上ることができる。雲が切れ、夏の陽射しが戻っていた。途中で振りかえってみればやはり穏やかな海が広がり、なかなか眺めがよろしい。

上りきったところに立派な仁王門があり、その正面に本堂が見えた。仁王門をくぐり抜け2人して汗をぬぐっていると、

「どうぞ自由にお参りしてください。冷たい麦茶もあります」

すぐ左の無人と思った小屋からお坊さんが顔を出し、声をかけてくれた。本堂へは靴を脱いでお参りするのだ。

「どうぞ、冷たい麦茶でも、どうですか」

人の善さそうな、にこにこしたお坊さんであった。麦茶を頂きながら太宰の話や義経伝説を伺う。妻が聞いた。

「ここに来たんですね」

太宰の描写はいかにも古ぼけたつまらぬ古寺で、興醒めして苦々しくさえあったなどと当寺関係者にとっては甚だ遺憾な登場の仕方をさせられているばかりか、処遇においても今別の本覚寺とは随分差をつけられている。今ここに目にする義経寺は、立派に再興（といていいのか）せられており、お坊さんの日々精進もかくやと境内はひとつのごみも無く掃き清められ、また夏草はきれいに刈り込まれ、暑い日の参詣客を気軽にもてなすなど気持ちのいいものであった。

「義経は、岩の上で、3日3晩お祈りをしました。その際母から授け

られ、戦には必ず携帯していた観音様を安置し、その満願の日、白髪白髭の翁が忽然と現れ、竜馬3頭を与えると告げて消えたのです。祈祷の岩から降りてみると3頭の竜馬が3つの岩穴に繋がれてあり、その馬に乗って無事海を渡ったという伝説です。馬が繋がれていたという大きな岩を、来るときにご覧になったでしょう」

「あら、岩なんてあったかしら」

「いや、どこに、あったかな」

「あったでしょう、分からないはずはありません」

と言って笑っている。「あんな大きな岩ですから」

「本当ですか」と言って、仁王門の裏に回ってみるが、無い。



既石

「そこじゃありませんよ。お寺の、下の入り口の所ですよ。まあ、下にいったら見てください。すぐ分かりますから」

岩ねえ、あったかなあ、有りますよとそんなやり取りの後、御朱印を頂いた。麦茶をご馳走になったうえ色々お話しも聞けたので、その小屋のような売店で何か記念になりそうなものを買おうと思ったが、だめであった。商売気は無

さそうだった。

さて段々を降りつつ、岩はどこだと腑に落ちぬ気持ちでいたが、

「ひょっとしてあれか」

「ああ、あれよ」

段々の途中から見れば、岩というには大きすぎ、山というには小さすぎる「岩」がでんとあり、お坊さんは、

「昔は下の道路のところまで海だったのですよ」

と言っていたが、なるほど海の中で波に洗われていれば岩だろう。その岩の横腹に穴があいていた。岩をぐるりと右に回り込めば、「既石の由来」という案内板があり、お坊さんから聞いた伝説が書かれてあり、その前方は海に向かって既石公園という広々とした海浜公園になっているのだった。太宰と中村さんはお寺の源家の笹竜胆をみて

「これか」

「これだ」

と拍子抜けしていたが、私と妻は既石に、

「これか」

「これなの」

と拍子抜けした次第である。いや、「次第である」などと偉そうに悪口は言うまい。この岩だって昔のように波に洗われ風雪になぶられ、今少し孤独の佇まいを留めておれば、観音様のご加護、白髪白髭の翁がどこかの穴に今も潜んでいそうな靈気も感ぜられようが、何しろ周囲はアスファルトの道路やらコンクリートの公園で固められて、穴の中が丸見えないのは気の毒である。この岩にだって同情すべき事情があると言えよう。

周囲は厩石公園と呼ばれ、様々に植樹され紫陽花も咲いている。私達はこの岩を眺めながら、弁当を食べることにした。仕入れておいたおにぎりサンドイッチだ。簡単なものだが、海辺育ちの妻は海で食べるおにぎりが好きだった。おにぎりを食べる妻にカメラを向けた。ファインダーの中の妻の肩越しに、波打ち際で遊ぶ親子連れが見える。夏休みの長閑な風景だった。

さて、簡単な昼食を済ませた私達は車で 15 分も走っただろうか、苦も無く本州最北端の龍飛に到達した。苦も無くというのはもちろん、太宰と中村さんの旅を思っただけのことである。2人は三厩からの 14 km を、2 時間半以上歩き通した。真っ黒い雲が、低く空を覆う中、海岸伝いの道では波のうねりが舞い上げる飛沫を浴びて、いよいよ凄愴とでも言うべき、絵にも歌にもなりやしない、ただ岩石と水の中を小走りに走るように突進したのである、と書いている。

私達は何ともあっさりと、到着した。夏の昼下がりの龍飛の海は、静かに陽光を反射してまるで湖面のようで、波打ち際は小波が寄せているだけである。外ヶ浜からここまで海は、天候のせいであろうが、まことに穏やかであった。なおも車でそろそろと進んでいくと、じきに突き当たった。コンクリートの壁が行く手を阻んでいた。本州における道の消息は、ここにおいて全く途絶えるのである。その向こうは海。消波ブロックが堆く積まれている。冬の波



龍飛文学碑

の激しさが思われた。

この道の尽きたところ、まさにここに太宰の文学碑はあったようだ。しかし今は台座と太宰碑公園と記した、少し錆びの浮いた表示板が遺されているだけだ。後から聞いたところによると、この道のどん詰まりに観光バスや車が押し寄せて漁業関係者に多大な迷惑をかけることになったらしい。これはまずいと今では少し手前の、旧奥谷旅館を改装し観光案内所とした龍飛館の前に据えられている。今年の3月に移築されたということで、太宰の苦笑が思われる。真新しい石組みの台座の上に、龍飛の海の底でごろごろ転がり角が削られたような、何かしら魚を思わせる自然石が配され、そこに『津軽』の一節が記されていた。前に立って眺めていると、龍飛の海の荒々しい波をかいぐり泳ぐ怪魚のように見える。この碑は、真冬の海の、風雪が舞い狂う季節に見るのがふさわしいのか。妻は写真撮影に余念が無い。碑の周囲には何故かライオンと白熊2頭のオブジェがあり、それらも格好の被写体になっているらしい。

奥谷旅館に入る。この案内所にいた眼鏡をかけた男性職員は親切で、私達に付いて、内部をいろいろと案内してくれた。また階段国道の入り口が分からずうろろうしていた時にも偶然出会って、道を教えてくれたりもした。



再現されたお膳

おばあさんにお膳を下げられるのもむべなるかな、きまり悪そうな酔っ払いの顔が浮かぶ。

『津軽』の旅の前半は、龍飛で終わる。東京から夜行に乗って、朝の8時に青森駅に着き、T君の出迎えをうけてから以降、酒の連続だ。ま

さて旅館だが、参考室という一番奥の右の部屋が太宰と中村さんの宿泊した部屋だ。5本のお銚子がお盆の上であり、1本は鉄瓶のなか。座布団が2つ並べられ、2人の写真がその前に置かれていた。この時代、隣部屋とは襖で仕切られ、廊下を挟んだ向かい側は奥谷家居住の部屋、そんな状況で「仰天するほどの恐ろしい蛮声を張り上げ」れば、

ずT家でお酒をご馳走になり、その日のうちに蟹田の中村さん宅まで足を伸ばしている。中村家においても蟹やお酒を存分に味わい、観瀾山での花見酒宴、E旅館へ席を移し、更に請われてSさん宅での狂乱の有様、再び中村さんの家に戻り、2人してお酒を担いで外ヶ浜を北上、今別のMさん宅で飲み、三厩の宿で飲み、翌朝も雨のあがるのを待つ間に飲み、龍飛まで歩いて奥谷旅館によく辿り着いて、着くや否やお銚子6本に、持参の酒を飲み、本当に、もう、書いているだけで酒臭いため息が出そうである。

旅館のおばあさんにそろそろお休みになりせいといわれた龍飛の夜が明け、あくる朝、寝床の中で聞いた童女の清澄な歌声。これまでの荒々しい酔いを一気に洗い流し、次章の旅の展開を予感させる清々しさである。

ここに至り私は少し考えた。太宰は、龍飛の寝床の中で、小泊のことを思わなかったろうか。たけさんに逢いたくてやって来た故郷である。岬を少し巡れば、小泊だ。しかし太宰はここでは何も触れず、素知らぬ振りしてくるりと引き返す。三厩まで歩いて昼食をとり、バスで真直ぐに蟹田の中村さんの家まで帰った、というだけで、前半の旅は龍飛崎の断崖のように突然終わってしまう。「いいところは後回しという、自制を楽しむ趣味」がさせるのか。

などと太宰のお気持ち^{こころ}を忖度^{さぐり}している私達も、今日はここまでだ。時計の針は3時を回っている。これから弘前まで戻らなくてはならないのだ。龍飛の景色を噛み締めながら、今日一日の出来事を振り返りながら名残惜しい心持ちを抱えつつ、帰途についた。

弘前から

前日、龍飛から弘前にとんぼ返りした私達は、大鱈温泉で一夜を過ごした。

3日目の今日は、観光タクシーで五所川原や金木方面を案内してもらおう予定なのだ、その運転手さんとは、弘前駅で8時30分の待ち合わせだった。

「どんな運転手さんかしら。ガイドしてくれるのでしょうか。でも誂^{あや}り^りで聞き取れるかしら」

妻は心配顔である。私は、とにかく場所場所へと連れて行ってあげればいと割り切っていた。広い津軽を限られた時間^{ひかり}で我儘^{わがまま}に移動するには、列車では到底無理であり、やはり車、それも太宰所縁の地に精通し

た、観光タクシーをお願いするのが一番、というのが散々計画を練った末の結論だった。更に、運転手さんにガイドを望んでも、まさか小説の背景を下敷きにした逸話など、期待するほうが無理というものだろう。私は太宰の初心者ではないのである。行って、その場で当時の人々と擬似回想するのだから、しかも昨日の龍飛までの旅で、かなり中村さんとも（勝手に）仲良くなっており、中途半端な解説などでできれば御免の気持ちで、ただ無愛想な人でなければ、という程度のいい加減な気持ちであったのだ。その上、今日の訪問地には芦野公園が入っている。この旅を思い立った大きな理由のひとつが、冒頭に述べたように阿部合成作の、あの文学碑の前で、30年前と同じポーズで写真を撮ることであったから、そこは旅のハイライトでもある。できれば楽しく、一日を過ごしたいというのが正直な気持ちであった。

8月とはいえ平日の弘前駅である。朝の8時半という時間では、駅を利用する人々も多い。当地ではひょっとすると、学校の夏休みも終わっているのかもしれない。

そんな人混みの中、「吉井様」というネームカードを胸の前に提示し、一心にこちらを見ている一目で運転手さんと分かる人がいた。何故ならワイシャツにネクタイ、それに白いカバーのかかった警察官のような帽子。

私達は小走りに駆け寄り、

「お早うございます。吉井です」

「お待ちしていました。よろしくお願いします」

「お早うございます。よろしくお願いします」

3人が一斉に、人混みの中で夫々挨拶をする。人の流れをせき止めている。

「お荷物を持ちましょう。どうぞ、どうぞこちらへ」と構内を出口のほうへ移動しながら、「津軽交通のAと申します。今日一日ご一緒させて戴きます。よろしく御願ひ致します」胸を張って、きびきび動く、生真面目そうな運転手さんだ。

結論から言うと、Aさんに会う前の私と妻の心配は、全くの杞憂に終わった。それどころかAさんのお蔭でその日一日が忘れ得ぬ思い出となり、この紀行文を書く大きな動機にもなったのだから、今は感謝の気持ちでいっぱいである。本当に楽しく、有意義な一日であった。私の知らない太宰の生活の断面を、次々と紹介して下さった。車中では互いに喋りっ放しで、正直に言うが、翌日はぐったりしてお腹をこわした。お腹をこわしたのは、まさか、Aさんとは関係ないと思われるが、妻も亭主

がこんなにも一日中喋るのを初めて見たのではないか。

Aさんが演出してくれた、弘前発の思いで深い一日を、以下に記していこう。

「今日はこのコースをいきますので、ご覧になってください。まず、北に向かって一気に十三湖まで参りましょう。私の名刺です。本日一日、よろしくお祈りします」

タクシーに乗り込んだところで、今日のスケジュール表と名刺を受け取る。Aさんの名刺には「観光タクシー乗務員 青森検定、太宰治検定」とあった。

弘前駅を出て、国道 339 号線に行く。すぐに藤崎町だ。国道の両側はりんごの栽培が盛んで、この町である「ふじ」という品種が発明されたのだとAさんが言う。次の町板柳も少し走ったところで、

「ああ、今日は少し上のほうに雲がかかっていますけど、よく見えますよ。左手をご覧ください。岩木山です。太宰は岩木山をです、ね、1625mの岩木山が、満目の水田の尽きるところに、ふわりと浮かんでいる。したたるほど真っ蒼で、富士山よりもっと女らしく、十二単衣の裾を、銀杏の葉をさかさに立てたようにばらりとひらいて左右の均斉も正しく、静かに青空に浮かんでいる。透き通るくらいに嬋娟たる美女ではある、と表現しています。どうですか、素晴らしい表現でしょう。太宰はものの喩えや表現が非常に巧みな作家です。十二単衣の裾をばらりと開いて左右の均斉も正しく、とか、満目の水田の尽きるところにふわりと浮かんでいる、なんていうのは、おそらく他の作家ではこういう表現はできないです」



岩木山（初冬）

津軽富士といわれる岩木山が、なるほど平野の彼方に富士よりはるかに鈍角に裾を開いて佇んでいる。山肌が霞み、山容もぼやけて、朝の岩木山はまだ眠っているようだ。岩木山は津軽の人にとっては自慢の種であろう、太宰も馬鹿にされたくない一心で故郷の誇りを特に力を込めて書いたに違いない。それを諳ずるAさんの名調子も、悪くない。

「昨日はどちらへ行かれました」

「青森からレンタカーを借りて、外ヶ浜を上がって、龍飛まで行ってきました」

「じゃ蟹田は、観瀾山は行きましたか」

「ええ、文学碑を見ました」

「そうですか、文学碑を見て、そこから平館、今別、三厩。今別の本覚寺は」

「本覚寺って」

「太宰が鯛を買って、新聞紙を貰いに行った寺ですよ」

「中村さんの、貞伝和尚云々の」

「そうです、そうです」

「行かなかったなあ。気がつかなかった。通り道にあったの」
残念なことをした。

「三厩では、義経寺に行かれて」

「行きました。そこのお坊さんにいろいろ話を聞いて、例の厩石が最初分からなくて、お坊さんにあったでしょう、と言われても分からなくて、改めて見てこれかと」

「いやあ、でもよくお寺を見つけましたね。あそこも気をつけないと素通りしてしまう所なんです。吉井さんはなかなかお詳しいですね。今日は時間がたっぷりありますから、いいところをご案内しますから、楽しみにして下さい」

「Aさん、実はね、30年前の20歳のときに、芦野公園の文学碑の前で、写真を撮ったんですよ。今年は太宰の生誕百年でもあるし、よし津軽に行って、もう一度同じ場所で同じポーズで写真を撮ってみようと計画したんです。今日がその日なんですよ」

「それはいいですね。じゃ、今日は存分に写真を撮ってください。いや、そういう方は珍しいですよ。でも分かります分かります。ご主人は太宰がお好きなんですね。」

もうすぐ十三湖です。昨日はご覧になってないでしょう。浅い真珠貝に水を盛ったような、気品はあるがはかない感じの湖である。波一つない。船も浮かんでいない。ひっそりしていて、そうして、なかなかひろい。人に捨てられた孤独の水たまりである。流れる雲も



十三湖と岩木山

飛ぶ鳥の影も、この湖の面には写らぬというような感じだ。太宰はこのように表現しています」

十三湖。津軽国定公園である。しじみが名産だ。心地よい風が、湖面に小波をたてている。湖水は茶色で、澄んでいない。

「いつも水はこんな色ですよ。この案内板の前で写真を撮りましょう。どうぞ」

やや離れたところに釣りをしている人がいた。十三湖は日本海に向かって口を開いた汽水湖だ。何が釣れるのか、竿を2本だして、じっと座っていた。

「あちらが日本海です。あの橋の先はもう海です」

渺として水平線が空と溶けあっていた。

車に戻り 20 分あまり走り、小泊に到着。集落の中の道を、左折右折を繰り返しながら進む。車中からではどこをどう走っているのか見当がつかない。

「ここがたけさんの家です」

突然舞台が始まってしまった。え、太宰が御免くださいとたたいたガラス戸が、これですか、などと呆けていると、

「表は改装されています。今はどなたも住んでいないのですよ。越野家から人手にわたっていますから」

そういえばガラス戸はサッシだ。昭和 19 年にサッシはないだろう。それがぴったりと閉ざされていた。間口 3 間くらいのこぢんまりした金物屋で、表はガラス戸だったと書いているから、当時と外観はそれほど変わっていないのかもしれないが。

少し行ったところの向かい側に、横野たばこ店があった。太宰が留守のたけさんの行先を尋ねた、痩せこけたおばあさんのお店だ。

このお店が大変なことになっていた。いや、少なくとも、私には、たった一軒

で『津軽』の一場面をまったく引き受けてしまっている感じがして、それは私のような浮ついた旅行者が押しかけるたびに、かなり本来のお仕事に差支えが生じているのではないかと危惧され、お店の中に入るのも躊躇われたのだが、A さんはかまわずガラス戸を開け、

「こんにちは、お邪魔します」



横野たばこ店

と、顔なじみの様子であった。お店の奥さんは、いやな顔もせず、気持ちよく観光客の我々に応対して下さった。たけさんの孫に当たる、越野由美子さんがこのお店に託したメッセージや写真も拝見し、越野家が当地を去ってからは観光客を一手に引き受け、越野家と横野家の双方の資料を展示して太宰ファンを喜ばせていたのであった。狭い店内でお話を伺っている間にもお店のお客が来店し、一通り拝見したのち、そっと失礼させていただくことにした。

太宰はこのお店の瘦せこけたおばあさんに、越野さんは運動会に行きましたよと教えられ、田圃の畦道をとおり、砂丘を越え、学校の裏手に回って呆然、万国旗たなびく悲しいほど美しく賑やかな祭礼を目撃する。今私の目の前にはアスファルトの道路が走り、住宅が立ち並びどこが田圃で砂丘だったのか見当もつかないが、広い運動場があり、そこでは少年野球の練習が行われていた。

道に沿って少しばかり歩くと、運動場への降り口がある。降りきってすぐ右に、石碑が建てられていた。たけさんの掛け小屋のあった場所、つまり2人の再会の場所だ。

「ここか、ここで逢ったのか、筵で作った掛け小屋で、運動会を見たのだ、ここに2人で並んで座って見ていたのだ」



再会場所に建つ文学碑

私は心の中で、呟くだけだった。口に出すことはなかった。私の知り合いである2人があの日あの時、再会した。その場所に、やっと私も連れてきてもらえた。知り合いの事件でなければ、なんでもないただの草原の運動場である。妻は特に感慨は無いようだった。たけさんの家からここまで、1枚の写真も撮っていなかった。

次に向かったのが、小説「津軽」の像記念館である。ここでたけさんの、生前のビデオ映像を見ることができたのは嬉しかった。

「ここでね、たけさんのビデオを見なかったら、何にもなんないのですよ。あ、先生、こんにちは。こちらのお客さんに、ビデオ見せてあげてください。お願いします」

Aさんは、偶然居合わせたらしい、この記念館の初代館長先生という方に挨拶しながら、ビデオを見る手配をしてくれた。そのビデオには、地元テレビ局のインタビューを受けて再会の時の状況を語る、たけさん

の姿があった。

「太宰はどんな服装をしていましたか」

「何か、編上げ靴のようなものを履いて、ゲートルを巻いていました」

「ゲートルを巻いていましたか」

「はい、巻いていました」

「上着はどんなものを着ていましたか」

「上は、忘れてしまいました（笑）」

「たけさんのことは太宰は、すぐ分かりましたか」

「このほくろを覚えていて、やっぱりほくろがあったと言っておりました」

アナウンサーの質問に、^{うろと}と答えるたけさんは、優しそうな普通のおばあさんにみえる。明るい陽光の中で昔を思い出しながら、話すその表情は、とても穏やかだ。たけさんが津島家にいたのは13歳から17歳の間で、その間2歳から6歳になる修治の子守りをした。そして46歳で突然再会するのだ。修治は35歳になっていた。逢った瞬間に、心が通い合ったという。

しかし、考えてみればみるほど、不思議ではないか。修治はともかく、たけさんもまだ子供とっていい年である。幼すぎる頃の僅かな時間の交流ではないか。その僅かな時間が、2人のその後の人生を、規定している。この関係はほとんど奇跡とっていいのではないか。修治はたけさんを慕い、たけさんも修治のことを片時も忘れることはなかった。そして30年ぶりの再会は、望んでいたことを望んでいたもの同士が、ようやく約束を果たしたかのように、寸分の気持ちのすれ違いも無く、故郷で行われたのだ。

奉公人と主家の子供という関係、突然の別離（奉公の終わり）から30年という時間の隔たり、東京と津軽という空間の隔たり、戦争中という時代性、こうしたことが全てない交ぜになった末の再会なのだ。2人の織りなした奇跡に思い至ったとき、たけさんの少しはにかんだような笑顔が、私の目の中でずっと^{しみ}滲んでいった。83歳のたけさんは思い出を語り、幸せそうだった。私も、今日のいい出会いに、心が和んでいった。

再会の日、太宰はたけさんの家に宿泊したのだと、Aさんから聞いた。そして夜、太宰は心の中で長年思い悩んでいた、自らの出生に関わる疑念を口にし、たけさんに強く^く嗜められたという。太宰の『津軽』の旅の目的は、たけさんに再会すること、そしてたけさんにその疑念をぶつけ答えを得ること、この2つにあったのではないだろうか。その結果どのような答えが返ってこようと、たけさんの答えてくれた言葉を受け止め、

これを真実として自分の心に沈殿させようという気持ちでいたのだと思う。再会を語る、たけさんの温顔は、傷つき易い魂を救った安心感に包まれているようにみえた。

時刻はお昼近くになっていた。昼食は道の駅で、十三湖名物のしじみを使ったしじみラーメンだった。

「次はいよいよ芦野公園ですよ。たくさん写真を撮ってください。その次に金木へ行きます。芦野公園の文学碑の傍らに、銅像ができたのはご存知ですか」

「たしか今年の6月に、除幕式をやったのでしたよね」

「ええ、芦野公園は懐かしいでしょう」

私は休憩もそこそこに、

「早く行きましょう」

とAさんと妻を急き立て、食堂を出た。

以前芦野公園に来たときは、津軽鉄道に乗ったはずだが、その記憶があまりない。駅から文学碑までの道のりも、覚えていない。この度は車で、しかも北から下る格好なので、Aさんは公園の裏の駐車場に車を止めてしまった。てっきり駅舎のほうから入るものだと思っていた私は、あてがはずれた。



芦野公園駅

Aさんに先導され、いよいよという気分で公園に足を踏み入れる。5分もかからず銅像に直面した。

その銅像はマント姿で、左手でコートの前を押さえ、視線は金木の生家の方角を見ており、顔は面長、なで肩で、身長176cmの等身大という。高さ2mはありそうな巨大な自然石の上に台座があり、下駄を履いた太宰が、両足揃えて佇立している。面長の顔立ちやなで肩の姿が意外であった。

さてその右手前方、歩いてきた道の突き当たりに、思い出の文学碑はあった。30年ぶりの私の再会の瞬間だった。

「あったね。こんな所だったのか。おい、写真を出してくれよ」

写真と風景を比べながら、妻は、

「写真と同じだわ。よかったわね」

しかし、まさか場所を移されたということはないだろうか。いくら何でももっと駅の近くにあるものだとばかり思っていた。碑の右手は階段

が下っており、その先は遊歩道が池の淵を巡るように這っていた。この道を 10 分もかからず行けば駅へでるのだと、A さんは言う。通りすがりに簡単に撮った写真のつもりでいたが、案内図を見ながら、探しながら、小走りに走って来たのかもしれない。向こうから若い男が駆けて来やしないか。



文学碑

「下の台に貼り付けた石のモザイクは、変わってないわ。植え込みが違うけど。碑の周りのモザイクも変わってないわ」

妻は写真と実物の比較に余念がない。

「さあ、撮りましょう、どうぞ」

「撮るわよ」

2 人ともにやにやしている。私はやおらサングラスを取り出し、多少髪をなでつけたりして、ポーズを決める。

「こんな感じかな、1 枚撮って見て」

デジカメなので、すぐにモニターでチェックできる。少し違う。

「カメラはもう少しこっちじゃないか」

妻を左に移動させ、もう 1 枚。そしてチェック。違うな。全身が写っている。

「膝からは要らないんだよ。もう少し前から撮ってくれよ」

「このくらい、もっと寄る」

なかなかアングルが決まらないのである。せっかくここまで来たのだから、きっちりしたい。30 年の重みがあるのだ。

「これじゃ、あんまりアップだよ。指先が入ってないよ」

「そう。じゃ次、いくわよ」

チェック。左に寄り過ぎ。下手くそ。

「これでどうでしょう。似てないですか」

A さんのものをチェック。いいか。

もう、だんだん恥ずかしくなってくるのである。周囲に人気が無いのが幸いだ。妻は後で文句を言われたくないので右、左、前後に動きそこらじゅうから撮っている。文学碑の背後からきつと、20 歳の自分が覗いているに違いない。このオヤジ、いったい何をやっているのだと。あきれ返り冷めた視線か、それとも未来の自分に苦笑いを浮かべたか。

「A さん、撮ってあげますよ、2 人で」

これは私の照れ隠しである。

不死鳥もさぞ面食らったことだろう。ガヤガヤと写真だけとって、その場を離れて行った一団に。あの頃、同人雑誌などやっていた文学青年は、容易に他人を傷つけ、傷つけたことに気づいて自分も傷ついた。要するにおっちょこちょいだったのだ。そして今日も、碑の周りもじっくり見ず、一指に触れるでもなくつくづく眺めるでもなく、碑を背にして座り写真を撮ってそのまま帰ってしまった。なんのことはない、まだ治ってないのである。これじゃまた写真だけ撮ってきました、というような感じじゃないか。ほかの場所ではじっくり堪能しているのに、ハイライトと定めた場所に来た途端、浮ついた気持ちを抑えきれない。20歳の写真の男のほうが、よほど重々しく見えた。

「では、最後の金木へ行きましょう」

金木には斜陽館がある。しかし、Aさんは「新座敷」という場所があって、そこは太宰が家族を伴って疎開した際に住居としていたところであり、まだあまり知られていない場所です、是非、行きましょうというのだ。

斜陽館は大勢の観光客で、ごった返していた。私達はそこから90mばかり東に移築された「新座敷」を訪れた。

とある洋品店の前で車を降り、お店の脇に回ると、裏に向かって古い平屋の家屋があった。玄関から入る。ひっそりと畳の部屋が広がっていた。ここは斜陽館の喧騒が嘘のように、また溢れる人だかりも無く、静かに過去と対面できる。管理をしておられる若いSさんという方が、丁寧に説明してくださった。もともとこの家は、津島家の離れとして大正11年に建築された。結婚した長兄の新居としたのである。太宰は昭和20年7月に家族を伴って疎開、終戦をはさんで翌年11月までの1年4ヶ月をここに暮らし、23作品を執筆した。やがて斜陽館は津島家の手を離れることになり、新座敷だけが現在地に移築され、文治氏一家の住居となった。一方、疎開を最後に二度と帰郷することの無かった太宰は、東京で入水自殺をする。奇しくも昭和23年6月、同じ年月の出来事となった。

文治氏とその家族が暮ら



津島家新座敷

し、生母が病床に臥し、太宰が母を見舞いそして疎開生活を営みと、津島家の数々の歴史が刻まれている場所だ。斜陽館が豪壮さを誇り、津島家の全盛に目を見張る館なら、ここ新座敷は、家族が寄り添い暮らした姿を偲ぶ場であろう。床の間のある 10 畳の和室で、Sさんと正座で対面し説明を伺ううちに、そんな思いが込み上げる。この和室に続く 6 畳が、太宰の仕事場であったという。執筆に使った小さな座卓と、愛用の火鉢が並んでいた。

「吉井さん、その机の前に座って、写真を撮りましょう」

Aさんが言うので、妻と並んで正座する。太宰の仕事部屋の、その机に向かって座るとは。撮ってくれた写真を見ると、妻は笑顔だが、私はかしこまっている。『親友交歓』『トカトントン』『母』『庭』『苦悩の年鑑』等等、ここで、こうして、書いたのか。

洋間には、幼い兄弟で撮った写真が飾られてあった。後年病床の母を見舞った太宰が、そっと席を外し、涙をこらえたという洋間だ。その写真の背景の飾り屏が、同じ場所にある。写真の太宰は小さい子を抱いて、じっとこちらを見ている。新座敷には、太宰治ではなく、津島修治の空気が色濃く漂っていた。

新座敷見学は、出発のときに渡された、旅程表には載っていない。時間を見ながら急遽寄ってくれたのだろうか。Sさんにお礼を言い、玄関から出たところで写真を撮る。家屋の外壁は、杉板のようで、妻に、

「昔の家はみんなこのような杉板で、できていたんだ」

半端な知識をひけらかすと、

「いやいや、これは全部ヒバです」

とAさんに訂正された。

「大変なお金と手間をかけていますよ」

そうだった。ここはヒバの大産地なのだ。香りを確かめようと壁板に鼻を近づけたところを、妻にパチリと撮られた。ヒバの匂いはさすがに失せていた。

「それでは、弘前に戻りましょう。電車にお乗りになる時間もあるでしょうから」

「今日 1 日堪能しました。たけさんのビデオや、新座敷は、まったく知らなかったのでもいい思い出になりましたよ」

「Aさんに案内していただいて、本当によかった。楽しかったわね」

この 2 日間、いろいろな方達と話ができたのもよかった。義経寺のお坊さん、龍飛館の若い職員の方、横野たばこ店の奥さん、新座敷の S さん、そして心の中では中村さんやたけさん、太宰であり津島修治であり、

そして芦野公園で30年ぶりに再会した自分であった。

車は朝来た道を、逆に辿っている。タイムマシンで現在に戻っていくようだ。

「こんな話があります。太宰文学に関する講演会がありまして、質疑応答の時間になってからある女性が質問をしました。自分は太宰の小説をいろいろ読んだが、マイナスイメージばかりでどうも好きになれない。実生活でも女性を道づれに自殺未遂を繰り返したりして、人間として好きになれない。郷土の作家として誇りを持ってない、というわけです。吉井さんはどうですか、太宰の作品で何がお好きですか」

「私は『お伽草紙』がいいですね。人に勧めるときも、必ず『お伽草紙』です」

「そうです、吉井さんそのとおりです。さすがです。その質問した女性に対して、先生はこう言ったのです。あなたのおっしゃることはそのとおりです。そのとおりのことを太宰はしました。しかし作品についていまいし申し上げると、あなたは『お伽草紙』を読みましたか。まだですか。ではお読みになってください。お読みになった後で、もう一度太宰に対する感想を聞かせてください、とこういうことです。太宰のユーモア、譬えの巧さは比類がありません。また、作品は多数翻訳されています。翻訳者の方は、太宰の文章は大変訳し易いと言うそうです。太宰は語学が得意でした。東京に出てきて津軽訛りが抜けず苦労しましたが、頭の中で一度英語で考えて標準語に直したそうです」

車窓は一面の青田だ。今年の東北地方は梅雨明けも無く、はっきりしない天候のまま8月を迎えお盆も過ぎた。日照不足で作柄が心配されたが、出穂率は平年並みに回復したらしい。

満目の水田の尽きるところ、十二単衣の裾をばらりと開いて銀杏の葉を逆さに立てたようにふわりと浮かんでいる——Aさんの名調子が耳に心地よい。この人も太宰が好きなのだ。岩木山が好きなのだ。いい文章を人に語んじてもらうのは、いい音楽を聴くよりも楽しい。まして、いままさに満目の水田の尽きるところに、その情景を目の当たりにしているのだ。夕景の中の岩木山に、お疲れ様でしたと別れを告げる。やがて水田はりんご畑に変わる。早生のりんごが赤く色づき、目に鮮やかだ。

「これもこれから台風が来たりして、一年かかって丹精こめても、収穫するまではお金になるか分からないんですから大変です」

休耕田のなかに、時折ぶどう棚が見える。転作奨励で、スチューベンというぶどうを作っているらしい。

「道路の右に、ガードレールのような柵があるでしょう。あれ、重ね

て積み上げると 5m くらいの壁になるんですよ。日本海からの季節風を防ぐ工夫です」

この広大な津軽平野を吹き渡る北風は、どんなものだろう。

「その壁には下向きにスリットが入ってしまっていて、風の吹き抜ける力を利用して、道路の雪を吹き飛ばすのです」

冬の津軽も見てみたくなった。そのときもまた、Aさんに案内を頼もうか。

「地吹雪ツアーもありますよ。厳しいですけど、防寒対策をして、是非いらしてください。いつでもご案内いたしますよ」

私達はそろそろ、弘前の入り口に差し掛かったようだ。車の数もだいぶ増えてきた。今日の旅程も終わりに近づいている。車内での口数もめっきり減り、隣のシートでは妻がうつらうつらしている。あと 30 分もすれば、Aさんの車を降り、お別れである。

行きはよいよい、帰りはこわい

変な憂愁が胸中に沸いて出る

『お伽草紙』で、浦島さんが竜宮から帰る場面である。楽しみが終わり悦楽が去り、夢見心地からふと我にかえるとき、変な憂愁が胸に湧いて出るのも仕方あるまい。

やがて車は、何事も無く、すいと弘前駅の構内に滑り込む。午後 4 時になっていた。朝から 7 時間半、Aさんには 30 分残業させてしまった。車から降り、私はすぐに歩道に上がって、トランクに入れた荷物の受け渡しをする、Aさんと妻の姿をカメラに収めた。

「有り難うございました」

「有り難うございました。お気をつけて。それでは失礼します」

Aさんはさっさと行ってしまった。私は歩道を下り話し掛けようとしたが、運転席に乗り込むAさんに、タイミングを失した。荷物を抱えながら、走っていく車を目で追うと、カーブしていくAさんがこちらを振り向き、目が合った。急いで頭を下げると、Aさんも頭を下げた。車はそのまま去っていった。

私と妻の津軽 3 泊 4 日の旅は、無事終わった。太宰は 25 日間の旅を終え、6 月 5 日に日焼けして元気に帰宅したそうである。私達も天候に恵まれ少し日焼けし、また出逢った地元の人々にも親切にされ、思い出を数多く胸にして、帰宅した。

芦野公園の写真を、妻が早速プリントした。

「たくさん撮ったけど、一番ポーズが似ているのをプリントしたから」

そして、かつての写真と 2 枚、並べてアルバムに貼り付けた。そこには、裏切られた青年の姿があった。別人の雰囲気もある。自分でも苦笑の出る始末だ。不本意でさえある。思い出の再現など、得てしてこんなつまらない結果になるのだ。

「玉手箱を開けたんじゃないの」

妻は笑いが止まらない。まさか 300 歳のおじいさんではあるまいし、しかし 30 年の歳月は確実に、人を、変えたのである。

「年月は、人間の救いである」

浦島はそれから 10 年、幸福な老人として生きたというが、私も妻も、憚りながらもうしばらく社会の中で働いていかねばならぬ。

津軽の旅で思い出は蘇り、新しい出会いにも恵まれた。そうした出来事はこれから先、年を経るごとに良き思い出として、私の中で熟成されていくに違いない。

さて長くなった私の旅紀行も、感謝の言葉とともに、そろそろこの辺りで締めくくりにしたい。津軽と、A さんをはじめ、お世話になった方々に。いずれまた、お会いできる日を楽しみに。

お世話になりました。そして、
有り難うございました。

「 聖地 津軽へ 」

東京都文京区 須田 由美子

一章 弘前

全くの偶然だが太宰生誕 100 年の記念に当たる今年の春、私の未だ叶わぬ夢であった太宰の故郷を訪ねる旅が舞い込んで来た。

30 数年の星霜を共にした夫が珍しく休暇を取り 3 泊 4 日の青森の旅を提案してくれたのだ。

太宰への思いは中学 2 年生の頃に遡上するが、町の小さな貸本屋にあった『女生徒』に始まり、以来太宰作品の虜になる。

大人になって結婚、出産、育児と平凡な日常に追われる中でいつか太宰との間に無意識な距離が出来ていた。

一男一女を育て上げ書棚を整理していたある日、セピア色になったしおりと共に封印していた太宰が私の前に現われた。

そうしてその日から 20 数年ぶりのお付き合いが再開したのである。

その後、多くの作品を読んだり三鷹や甲府の足跡を尋ねたり今までの空白を埋めるかの様に太宰に接して来たのだが故郷津軽に足を運ぶ機会はなく遠い夢のままだった。

予備知識として太宰の小説『津軽』を読み終えた夫に、宿を探して置くように言われ二つ返事で従った。

かくして連休少し前の 4 月 26 日その『津軽』をドアポケットに、車は聖地津軽を目指す。

曇天の関東地方を抜けると東北道に躍り出て来る電光掲示板には「東北地方雪 気温 0 度」の文字、ああ、この 4 月の終わりに雪である。

それでも楽天的な私は「弘前に着く頃には止むよね。」と能天気話しかけるが、超現実派の夫は「どうかな……」と冷静。

案の定、積雪の為東北道は通行止めになっており小坂インターより一般道の走行を余儀なくされる。

何度も地図を広げ、ようやく辿り着いた弘前公園には小雪が舞い満開の桜が溢れていた。

薄明かりの残る空間が花びらで閉ざされる。



弘前城

人は感動が胸を満たすと言葉を失くするのもかも知れない。

落ちて来る瀧のような桜を見上げてしていると目眩がした。

ゲーテは「ナポリを見てから死ね」と言ったそうだが、私は「弘前城の桜を見るまでは誰も死んではいけない」と伝えたい。

夜の帳が降りる頃ライトアップされた公園を離れ温泉ホテル「ドリーミン弘前」に荷を解く。

冷えた体を湯で温め再び弘前の夜に繰り出す。

寒さのせいかな街には観光客の姿はあまり見られない。

小雪の舞う路地にほんのりと提灯の灯る一軒の居酒屋を見つけ格子戸を引いた。

重厚な杉の一枚板で出来たカウンターだけの趣のある店だ。

紺緋に赤い襷の女将が左奥の席に案内してくれる。

暖の効いた店内ではサラリーマン風の男性2人と夫婦らしき男女が杯を傾けていた

軽く会釈をして席に就き先ず熱燗を注文する。

「東京からですか、寒がったでしょう？」。

「私も45年ここで生きているけどこの時期の雪は珍しくて驚いているのさ。」

東北美人の女将が酒を注ぎながら心地よい津軽弁を聞かせてくれた。

何かと良い年に訪れたものだ。

出された郷土料理はどれも美味しかった。

サービスで出していると言う「玉子味噌のかやき」には取分け感激した。

二章 五所川原 五能線

翌27日は居酒屋の主人が調べてくれた五能線の時刻表に合わせて五所川原へ向かう。

途中、留守番をしている娘から電話が入り「いま洗濯物を干していたらママの手袋が出て来たのでどうしているかなと思って……」と体を気遣ってくれていた。

五所川原に着くと車を駅近くの駐車場に預け10時11分発、深浦行き

の電車を待つ。

やがて憧れの五能線が体をくねらせながら入って来た。

乗客が降りきるのを待ちながらも心が早る。

大型連休前のせいかな席も疎らなこの単線は再び走り出した。

席に着くと私はバッグから筑摩の太宰治全集7『津軽』を取り出し検

証する。

木造、陸奥森田、鳴沢、小説と実際の景色とが同時進行して行く。

鯨ヶ沢に近づくと待っていたかの様に右前方から海がのっそり姿を現した。

沖には編みかけのレースの様な白波が走っているが思っていた荒々しさはない。

陸奥赤石、北金ヶ沢と日本海すれすれを律儀に走るこの車窓から太宰の物憂い顔が海を見ている。

江戸末期に忽然と浮上したと言う千畳敷の平らな岩肌を静かに波が洗っていた。



千畳敷海岸

ところどころが大きく窪んで海水を湛えた杯沼を見て「たくさんの大穴をことごとく盃に見たてるなど、よっぱどの大酒飲みが名附けたものに違いない」とは太宰らしい感想だ。

ここには大町桂月も訪れその紀行文の碑が立っているが

そのことは後に触れることにする。

千畳敷の駅から三つ目に「麿木」と言う無人駅がある。

ある日その駅と、そこに住む住民の日常がNHKの番組で紹介されていて、真冬の怒濤に対峙して佇む駅舎と健気な人々の暮らしぶりが強く印象に残った。

以来その駅に惹かれ、いつかそこに立つ自分を想像したが、計らずも私のセンチメンタルな願いが実現された。

今、電車は時間調整の為約3分の停車をすると言うのである。

乗り遅れを心配する夫を制し、実践躬行ステップを降りた。

続いて降りて来た夫に頼み「麿木」と大きく書かれた駅の名札の隣に立ち写真を取ってもらった。

思いがけない贈り物を頂いた気分だ。

麿木駅を出ると追良瀬、広戸そして終点深浦駅である。

深浦は江戸時代の津軽藩にとって最も重要な港町であったそうだが、今はそれほどの賑わいはなく昼下がりの海辺を歩く人も我々夫婦だけで、千葉にある漁村を思わせる風情は確かに旅人を無言で送迎しているかの様でもある。

海とは道路を隔てて立つ小さな定食屋で昼食を済ませ海沿いにある夕陽公園まで歩いた。

ここから見る夕日は有名だが、私たちにはそれまでの時間が無い。

公園の外れにある海産物市場でお土産を買い、13時41分発五所川原行きの列車に乗った。

今度の電車は先ほどのローカル線とは異なりスマートで洒落たスタイルをしている。



太宰治文学碑

クルージングトレイン「リゾートしらかみ」と言いガイドブックに依ると「くまげら」「樵」「青池」の3兄弟編成列車で秋田と弘前を繋ぎ其々の絶景ポイントを走るいわゆる観光列車なのだそうだ。

全席指定の車内はツアー客ではほぼ満席、外国語が飛び交っていた。

千疊敷の駅に近づくと、「次の千疊敷で10分間の停車をします。希望者は海岸を散策して下さい。合図の汽笛がなりましたら戻って来て下さい。」と車内アナウンスの声、津軽3兄弟も粋な計らいをする。

滑りやすい緑色の平らな岩を飛び石にしながら歩いて行くと太宰と大町桂月の文学碑に会える。

余談だが自宅の近所に昨年まで大町桂月が住んだ家があった。

今は空き地になり住まいであった事を標すアルミのプレートだけが残されているが雑司が谷にある墓地に参ったこともあり、特別な親しみを覚える。

旅と酒を愛した桂月が神経を患う同門の夏目漱石を思い「漱石も少しは酒を嗜むといい……」と書いたがそれを読んだ漱石は酒に馴れる様努めたと言う微笑ましいエピソードを何で読んだか考えていた。

ポーンと汽笛が鳴り我に返った。

それぞれに散策をしていたツアー客が乗り遅れない様に一齐にホームを目指す。

合図の汽笛を聞くまで桂月の碑に見入っていた我々を最後に「しらかみ」は再び走り出した。

やがて列車内では津軽三味線の生演奏が始まった。

この催しも「リゾートしらかみ」のサービスイベントになっているらしい。

広大な津軽平野に響くその音色は胸を切なくした。

三章 金木 芦野公園

午後からは旅のメインテーマである太宰の生家、斜陽館を訪ねる。

五所川原を発ち、津軽平野の真ん中を虫のように走っているとゆっくりと流れる雲の晴れ間から岩木山が姿を見せた。

裾を広げた全容は見られなかったが均整のとれた姿は美しく、なるほど十二単を纏った平安貴族のような山だと思った。

富士山が紫式部なら岩木山はさしずめ清少納言かな等と一人考えるのも面白い。

金木はすぐそこにあった。

いよいよ西日が眩しい。

斜陽をたっぷりと浴びた赤い屋根の館は明治の風格を保ち悠然と立っていた。

「太宰治 生誕百年」橙色の幕に黒く染められた文字が目に焼き付く。

所々朽ち掛けた壁のレンガが長い風雪を語る。

他の見学者に続き入場券を求めて中へと進む。

ガイドさんの説明を聞きながら各部屋を廻った。

明治40年、棟梁堀江佐吉に依り完成したとてつもないこの家でその2年後に太宰は生まれたのである。

こんなに沢山の部屋や豪華な調度品が並ぶ中で私が太宰を感じた場所は太宰が産声を上げたと言う小部屋と幼いその身の置き場所にした蔵に上がる階段のみであった。

この階段で食事を取ることが好きだったと聞き太宰の悲しみが伝わる。

備え付けのノートに「随分小さな部屋で生まれたね。」と書き残し今夜の宿のある芦野公園に向かった。

津軽鉄道の踏切を跨ぐと今はカフェになっている芦野公園の旧駅舎が見えた。



斜陽館



芦野公園駅旧駅舎

「緋の着物ともんぺをはいた娘さんがふさがった両手の代わりに口に咥えた切符を美少年の駅員にそっと差し出し少年も当たり前の様に赤い切符に鉄を入れる」

小説の名シーンが夕日を集めた駅舎をスクリーンにして鮮やかに浮かび上がる。

民宿「エンゼル」は公園の入り

口にあった。

インターネットで調べてこの安宿を予約しておいたのだ。

親切な女主人に案内され取り敢えず荷物を置き公園へと足を運ぶ。

ここも桜の名所と聞いたが弘前ほどの賑わいは見られなかった。

後で聞かされたのだが何故か今年は開花が少ないとの事だった。

ここには太宰の学友であった阿部合成作の文学碑が建立されており生前の太宰が好んで口にしたと言うヴェルレーヌの詩の一節が刻まれている。

「撰ばれてあることの恍惚と不安と二つわれにあり」

実感に乏しい詩文ではあるが、ここでも大いに太宰が偲ばれる。

暮れなずんで行く公園の中、ゆっくりと歩を進めていると木立の向こうに湖が広がっていた。

「夢の浮橋」と書かれた木製の長いつり橋が遠くへと続いている。

湖水を染めて夕日が赤く伸びていた。

細波が劇場カーテンのドレープの様に揺れている。

深浦の夕日を見ることは叶わなかったがこの夕日もきっと負けてはいないと思った。

感傷と言う言葉に無縁の主人をうまく丸めて、夕日が完全に沈むのを見届けてから宿に戻った。

宿では既に食事の用意が出来ておりその品数の多さに目を見張った。

前菜、お刺身の盛り合わせ、天ぷら、魚の煮付け、野菜の煮付け、とんかつ、焼き魚、焼き鳥、とても食べ切れなかった。

四章 十三湖

旅を追うごとに空は青く澄んで行くが岩木嵐は肌を刺し、手袋を置いて来た事に改めて悔いが残る。

3 日目は龍飛を廻って小泊から三厩とコースは逆だが『津軽』のクライマックスを肌で感じに行く。

津軽遠祖、安東氏一族が統治したと言われる中里辺りを更に北上するとやがて幽宮の様に十三湖が静かに姿を現した。

悪路の中バスに揺られて立ったまま外を眺めていた太宰は最も彼らしい多くの言葉でこの湖を飾っている。

どれほどの美辞麗句もその名文の前では笑止千万の類ここでの感想は差し控える事にしよう。

車を止めて外の案内図を見ている夫も寒そうだ。

さかな釣りとしじみで有名な観光地になっているらしいが、今は一艘の船も出ていない。

「名物しじみラーメン」と書いたいくつもの幟が風にはためき数件の店がきれいな色のビーチパラソルを広げている。

「太宰が旅をした昭和 19 年当時にもここにはパラソルがあったのかしら」とどうでも良い事を考える。

昭和 30 年代以前の出来事になると場面はいつかモノクロに切り替わってしまいこの様なカラフルな世界が私にはどうしても想像する事ができないのだ。

イメージの貧困であろうか。

パラソルの下に腰掛け、名物だからと夫はしじみラーメンを注文したが、朝食をとって間もないので私は止しておいた。

親切な女性の店員さんが十三湖の今昔を説明してくれたがパラソルの事は聞けないまま車は北上した。



しじみラーメン

五章 小泊 龍飛

小泊は日本海の突端にあった。

36 歳になろうとしている太宰が母親を慕う幼子の様に胸の思いを募らせて辿り着いた土地である。

先に立ち寄った小泊港は潮の匂いに包まれ漁港を囲む小屋にはイカとホッケが暖簾のように吊るされていた。

展望台に登って見渡すと港町の全景が眼下に広がる。

「やっとここまで来た……」初めて見るこの最果ての小さな集落が何故かいとおしい。

車は太宰の息遣いを載せて旅のラストシーンに選んだあの場所を目指す。

校庭を見下ろす小高い丘に小説「津軽」の像記念館があった。

「きちんと正座してそのモンペの丸い膝にちゃんと両手を置き……」

「足を投げ出して、ぼんやり運動会を見て、胸中に一つも思ふ事が無かった。」

彫刻家田村進氏作のこの再会の像は悲しいほど私の想像を満たしていた。

太宰は「生れてはじめて心の平和を体験したと言ってもよい。」と書いているが、少し俯いたその表情に計り知れない安らぎがあった。

もう少しブロンズの太宰と一緒にいたい私は時間で行動する夫に促され、(そんなに時間通りに移動するならツアーガイドになって旗持ちでもするがいい……) と不満を懐に隣接する記念館に入る。

平成8年に開設されたこの記念館には多くの縁の品が展示されているが、太宰と越野タケさんの縁者がしたためた数々の証言と、タケさんが



小説「津軽」の像記念館

運動会に持って行った古い重箱が生の『津軽』を物語っていた。

今は売却され、別の民家が建っていると言う越野金物店があった場所まで車を走らせた。

昼下がりの白いこの道を右往左往する太宰がモノクロのシーンになってまた出現する。

ついでに筋向いの煙草屋の痩せこけたおばあさんもひょ

っこり顔を出した。

太宰は蟹田を風の町と称したが、この後に向かった龍飛はそれ以上であった。

雪で通行が危ぶまれていた竜泊ラインも昼頃には開通になり四輪駆動の車は力強い音を立てぐんぐん山を登る。

道の両側にはつい先ほどまで稼働していたであろう除雪車の振り分けた真新しい雪がガードレールのように連なっている。

夫が鳥の糞で汚されたフロントガラスをすくって来た雪で洗い流したので私はくすりと笑った。

道を開けてくれた方々の労苦に感謝しつつ到着した龍飛は風の岬だった。

強風がワンピースの裾を吹き上げ強い日差しはサングラスを通して目を射る。

名曲「津軽海峡冬景色」が泣き声のように聞こえ、歌の先には北海道がはっきりと見える。

そんな雄大な景観の中、突如一つの段ボール箱が風上から転がって来た。

おばあさんが追いかけて走っている。

先ほど岬の外れで土産物を売っていた女性だ。

急な斜面を全速力で箱を追いかけ、ラグビーのタックルの様に滑り込んで捕まえた。

その勢いで崖から落ちてしまうのではないかとハラハラしていた私は「大丈夫ですかー？」と声をかけた。

「なアに一、こんな事は毎日ダヨ。今日の風はまだ弱い方ダヨー。」と明るく笑い得意満面で草原を登って来る。

あっけにと取られていると「それよりお姉さん、この焼き帆立は美味しいから土産に買って行ったら喜ばれるよ。」と勧める。

気を良くした私は数パックを袋に詰めてもらった。

展望台にある休憩所で少し遅い昼食を取り岬にある桂月の歌碑や吉田松陰の詩碑を巡った。

どれだけの古人がこの海原を臨み行く末を思ったのだろうか。

「青函トンネル記念館」を見たいと言う夫の意向で「道の駅」に足を伸ばしケーブルカーで海底に潜る。

太宰の足跡めぐりには殆ど付き添いだった夫が初めて輝いて見えた一瞬であった。



吉田松陰詩碑

第六章 三厩 蟹田

前にも述べたが、今回の旅は太宰とはまるで反対の順路を一筆書きのような具合で辿っている。

この日の宿は「民宿伊藤」と言い外ヶ浜の三厩にある。

やはりインターネットで探し当て予約を入れておいた。

情報では漁師が営む民宿で部屋からは海が見えるとの事だ。

途中で立ち寄った三厩の駅は、太宰が旅をしたずっと後の昭和 33 年に開業され、JR 津軽線の終点となっているのだが密かとして大人しい感じがした。

ゆるりと曲がる海沿いの道进行り 6 時少し前に宿に到着した。

優しそうな女性が玄関に出迎え 2 階の部屋に通してくれる。

窓を開けると確かに海が見える小奇麗な部屋だ。

風呂に入ってビールを 2 本頼み夕食を取る。

部屋に戻るとすたとんと朝まで眠っていた。

いよいよ今日は旅のファイナル、春風駘蕩の空の下三厩を出発する。

宿から程なくして義経伝説の義経寺に着いた。

弁慶を伴った源義経が平泉から逃れる途中、時化に会い中々海を渡る事が出来ずにいたが、観音に祈願をしたところ三頭の龍馬が岩穴に繋がれており、この龍馬に乗って無事に海を渡り蝦夷に逃げ延びることが出来たのでこの地を三つの馬屋すなわち三厩(みんまや)と呼んだと言う。

太宰は半ば鼻白む思いでこの伝説を聞くが歴史好きの夫はこの高い石段の上に立つ義経寺まで行くつもりである。

尻込みをするほど長いこの石段には弁慶の足跡だと言う大きな凹みや馬の蹄の跡があり歴史の重みが刻まれている。

寺の裏側に回って見ると切り立ったこの山の上にも人の暮らしの匂いがあり日々の辛苦を思った。



義経寺仁王門

古い山門を潜り石段を下りる時夫婦連れらしい男女にすれ違った。

晩春の海はきらきらと輝きどこまでも優しく穏やかであった。

眩しさに目を閉じるとそのまま意識が薄れて行く。

目が覚めると車は今別を通り越していた。

「えっ？」と振り返ったが後の祭りである。

言葉にはしなかったが、本当は今別の風景も記憶の中に留めて置きたかったのだ。

夫は事前に『津軽』を読んでいるのだから今別を知らない筈はないの

だが、
眠っている私を起こすのがかわいそうだったのだろう。
そういう人である。

蟹田の海岸線を走っていると港が見えて船が停泊している。
太宰は荒天の憂き目に会い龍飛行きの定期便に乗ることが出来なかった。

あまり利巧でない女中さんのいる宿で一夜を過ごし、徒歩で龍飛に向かっている。

私は夫に頼み車を港内に入れてもらう事にした。

停泊しているフェリーに野球のユニホームを着た 10 数人の高校生や数台の車が乗り込む。

人と車を載せた船はゆっくりと岸を離れて行く。

都会では決して見ることのない光景であった。

ところで蟹田では二つの目的があった。

一つ目は、とげくり蟹を味わう。そうしてもう一つは観瀾山の太宰文学碑に拝礼する事である。

海辺に立つ番屋らしき小屋の一軒を訪ねた。

入り口に近い所で作業をしていた 3 人の女性の中で一際大柄な女性が私の申し出を聞くと「蟹さがしてるの？ちょっと待ってて」と立ち上がり小屋の奥から茹でたての蟹 2 匹を持って来て我々の掌に乗せてくれた。



トゲクリガニ

初めましてとげくり蟹。

姿は毛蟹に似ているが、少し小ぶりである。

「お金は要らないけどそこは寒いから中さ入ってやすんでけ」と例の軽妙な津軽弁が我々を招き入れてくれる。

恐縮しながらも通された小屋の奥には薪ストーブが赤々と燃えており辺りはとても暖かかった。

薦められるままにストーブの前

に腰掛け食べ方を教わった蟹を味わっていると彼女はストーブの上で帆立貝を焼き始め、寒かっただろうと熱いコーヒーを入れ漬物や蟹を次々に出してくれた。

ああ、これが津軽人特有の「疾風怒濤の接待」なのだ。

夫は頼み込んで残っている帆立と蟹を土産に買い求めた。

薪ストーブの前で、目の見えなくなった老犬のフジコと共に記念の写真を撮り後日お礼状に3枚を添えて送らせて頂いた。

関東の人間として敬遠どころか津軽の人情をあり難く思い、感謝の言葉を述べて次の目的地である観瀾山に着いた。

観瀾山は百メートルにも満たない小山であるが、途中まで車で行き、そこからは徒歩で頂上まで上る。

太宰はここで花見をしながら友人やその仲間と文学論を交わすことになるも芭蕉行脚の掟に背き「人を誇りて己に誇るは甚だいやし」を見事にやってしまった。

私は若い頃この一説に感銘を受け「一、他の短を挙げて、己が長を顯すことなかれ」の言葉と共に自己への戒めとして、別紙に書き写し大切にしまっているが、今でも引き出しの整理をする度に取り出しては眺めている。

しかし常に実行されているかと聞かれるとどうも自信がない。

太宰と同様反省することの方が多い人生である。

陸奥湾を見渡す山の頂に文学碑は建っていた。

「かれは人を喜ばせることが何よりも好きだった！」と刻まれた文字を眺めていると様々な思いが交錯し涙がこぼれた。

ここは太宰がまだ中学生のころ親友のN君とピクニックに来てお弁当を食べた思い出深い場所でもあったと言う。

去り難い思いで碑の前に立っていると争う様な男女の声が聞こえて来た。

義経寺の石段ですれ違った男女だった。

どうやら登山道を間違えた主人に対して妻の方が抗議をしている様子である。

文学碑の前に立っていた我々に気がつき御主人は姿を消してしまった。

気まずい思いで人気のない公園を車に向かって歩いていると女性は我々と歩調を合わせる様に並んで歩いている。

「いいお天気ですねエ。」と何気なく話しかけた。

「ほんとにいいお天気ですね。先ほどはお恥ずかしい所を見られてし



観瀾山登山口

まいりました。」救われたような笑顔で応じる。

なんでも文学好きの夫の趣味に合わせて秋田から太宰旅に付いて来たが登山道のことで揉めたと言う事だ。

駐車場に着くと御主人が先に下りて車で待っていたのでほっとした。

やれやれどこも同じだと密かに胸を撫で下ろす一幕だった。

観瀾山を発つと後は陸奥湾に沿って外ヶ浜を南下し青森を旅の締め括りにする。

駅に着くと極彩色のねぶた祭りのポスターや明るい色の看板が目立ち東北の暗いイメージは払拭された。

県の中心を担うこの青森市は太宰が中学時代の4年間を過ごし文学に目覚めた土地でもある。

『津軽』には赤い糸で繋がれた未来の花嫁について弟礼治と語り合う少年らしい淡いエピソードが小説『思ひ出』から引用して綴られている。

「青森県近代文学館」「青森県立美術館」「合浦公園」など立ち寄りた場所は多いが、今夜には東京へ着かなければならない。

もう少し時間が欲しかった。

「きざな譬え方をすれば、私の青春も川から海へ流れ込む直前であったのであろう。」太宰はこの青森で過ごした日々をこう書いているが、ここにはもう一つ太宰の生涯を左右した大きな出来事があったと私は思っている。

昭和2年、雑誌社主催の講演会がこの地で開催され、そこには太宰が敬愛する芥川龍之介の存在もあった。

弘前高校に入学したての太宰は弟礼治や学友等と講演を聴きに駆けつけ大いに感激していたと言う。

それから凡そ2ヵ月、芥川の自殺を知り大きな衝撃を受ける。

度々の自殺未遂は多感な少年期に受けた傷の後遺症ではなかったのだろうか。

そんな事を思いながら時代の寵児（あこがれこども）が駆け抜けた青森の青い空の下を歩いた。

駅近くの食品館で昼食をとりエレベーターを使って地下にある海鮮市場へ立ち寄って見る。

しかしそこはこの近代的なビルの地下とは思えない大規模な市場であった。

新鮮な海の幸が所狭しと並び次々と手を伸ばしていると保冷剤の入った大きな発泡スチロールの箱は一杯になった。

土産品で後部が少し膨らんだ気がする車に乗り込み青森に別れを告げ

る。

「津軽よ また会おう」。

「さ、走るぞ」シートベルトをする夫に「うん」と答えて私もベルトをしっかりと締める。

夕映えの稜線が美しい。

これほど心に沁みる旅は今までに無かった。

これも太宰さんのおかげだと告げると太宰は頬杖を付いて「へへへ」と照れ笑いをするのであろうか。

ふと、隣で寡黙にハンドルを裁く夫にお礼を言おうと思った。

私の「津軽」

石川県金沢市 中 島 久 宣

1. 半島地域へのいざない

青森で生活する機会を得て、訪れた各地で心に残る情景に出会った。

青森県の形は、下北半島と津軽半島という北に向かって突き出た2つの半島の形によって他の県と峻別しやすい。この2つの半島は、青森県が本州の最北端に位置するという絶対的な地位を象徴し、最果てへの旅情を掻き立ててあまりあるものだった。

「最果て」感を強調しては青森の友人に申し訳ないのであるが、青森に着任したばかりの最初の土曜日に尻屋崎、日曜日に龍飛崎を往復したという暴挙に免じ、酔狂な青森旅情にお付き合い願いたい。

国道103号、通称「八甲田・十和田ゴールドライン」は八甲田山系から北上し、青森市内に入り国道4号に接続する。この交差点の手前にある道路案内標識が、まことに旅人の気持ちをくすぐるものである。標識上段に「下北半島→」下段に「←津軽半島」と記されている。十和田湖、奥入瀬、八甲田とドライブしてきた旅人にとって、まさに「はあ～るばる～♪来たで～♪あ～おもり～♪」である。函館ではなく本州最北の地「青森」に来たという実感を心に刻むのである。青森市が2つの半島へ分岐する要の位置にあることを端的に表す案内標識である。



青森市内の国道103号と国道4号の交差点付近

半島地域は、その先端がどんな所か確かめてみたい、その先っぽに立ってみたいといった、人が持つ原始的な本能の欲求を満たす場所、あるいは、これ以上行く所がないという征服感や達成感を感じたいという現代のささやかな冒険家の探求心を刺激する場所である。いずれにしても半島地域は旅人の旅情を掻き立てるものだ。

こんな旅人の気持ちを60年も前に鳥肌が立つ文章で表現した人がいる。太宰治である。「ここは、本州の袋小路だ。読者も銘肌せよ。諸君が北に向かって歩いてある時、その路をどこまでも、さかのぼり、さかのぼり行けば、必ずこの外ヶ濱街道に到り、路がいよいよ狭くなり、さ

らにさかのぼれば、すぼりとこの鶏小舎に似た不思議な世界に落ち込み、そこに於いて諸君の路は全く尽きるのである。」

青森に赴任して最初の日曜日に龍飛崎を訪れた時、太宰治の碑に刻まれたこの文章を読んで感慨をひとしおにしたものである。



龍飛崎の太宰治文学碑

太宰の言う「鶏小舎に似た不思議な世界」というものは今はもう無いのだと諦めていたところ、三厩から龍飛に至る国道339号で板柳バイパスが開通した。板柳という小さな漁村の海側に新しくできた橋の上から漁村を眺めると、これはまさに鶏小舎ではないかという光景を目の当たりにした。

山に張り付いた漁業集落の舟揚げ場は2階建てになっていて、2階部分は網など漁具の手入れをするスペースのようだった。新しく広い道路は昔の景観を壊しながら造成されることが多いが、板柳バイパスは古い集落を温存しつつ海側から眺める絶好のビューポイントを提供してくれている。



板柳集落を国道339号板柳バイパスから眺める。舟揚げ場が二階建てになっている。

2. 漁り火 ー津軽半島を彩る光ー

下北半島の下風呂温泉が「津軽海峡の漁り火」と温泉を組み合わせる全国に発信していたので、漁り火と言えば下風呂温泉とばかり思っていた。

漁り火は、初夏から初冬にかけて、津軽半島の西の日本海を北上して津軽海峡を東に抜けていくイカを追ってイカ釣り船団が発する夜間集魚灯の光のことだ。光害と言われることもあるが、現在の日本海から津軽海峡においては夏の風物詩であることは紛れもない事実だろう。津軽半島から見える漁り火は、海と空の一大スペクタクルを構成する重要な一員である。

特に、十三湖から龍飛に向かう国道 339 号から見える漁り火は、日本海の水平線上に並ぶ光の列となり大きなランドスケープの中で凜とした存在だった。

海岸沿いの国道 339 号の防波堤で、小泊岬を眺めながら、日本海に沈む夕陽を見送った後、水平線がうっすらと明るくなっていることに気づいた。これが漁り火との出会いだった。

波が打ち寄せる海岸から目をこらすと、水平線の向こう側に漁船がいるときは、メタルハライドで照らされた上空の靄がぼんやり白く輝いていた。

小一時間も眺めていると漁り火にも色々表情があることに気づく。水平線上に点としての光源が見えるものと光源は見えないが上空をうっすらと白めているものがある。白ではなく薄い橙色の光源もあるようだ。また時間とともに遠ざかって点光源が見えなくなっていくものや、だんだん光が強くなって横に動いているものが区別できるようになる。

さらに高い位置から眺める夜の海も、なかなか乙なものだった。

龍飛と小泊を結ぶ国道 339 号は「竜泊ライン」と呼ばれ、標高約 500 m の最高所に「眺瞰台」という展望台がある。小泊から海岸線を走り、傾り石から竜泊ラインを登り始めると、少し標高が上がるだけで、水平線の向こう側に隠れていた漁り火が点々と顔を出し数を増してくる。眺瞰台から見る小泊岬は津軽半島から粘土細工で細長くひねり出されたように海に向かって伸びる姿が印象的だ。特に月夜には、そのひねり出された細い半島を挟む海面が月の光で輝き、半島のシルエットを黒く沈み込めている。水平線近くに並ぶ漁り火と、半島の付け根の暗がり埋める小泊の灯りが無機質な空間に漂う光景は見飽きない。



国道 339 号から見る日本海の水平線上に並ぶ漁り火。右端は小泊岬のシルエットと下前漁港の灯り。



竜泊ライン最高所の「眺瞰台」からの夜景。左手前の灯りは小泊漁港。右に点々と見えるのは日本海の漁り火。

しかし、夜の眺瞰台は原生林に浮かぶ人工の孤島で、夜には人つ子一人いない。いとすれば野猿の群れだ。風が起こした原生林の葉擦れのざわめきに急かされて早々に退散することにした。

眺瞰台を後にして竜泊ラインを北上する。昼間なら前方に白い龍飛埼灯台と白い風力発電の大きな羽根が見えている。天気が良いれば、津軽海峡を隔てて北海道松前半島の山並みを間近に見ることができる。道路は針葉樹ヒバと広葉樹ブナ、ミズナラで構成される混交林の原生植生の間を海に向かって下っていく。龍飛埼周辺は、かつて青函トンネルの掘削工事が行われていた時には学校や商店、アパートが肩を寄せ合う街が脈動していたと聞く。

龍飛埼では2種類の漁り火を味わうことができる。一つは、夕日が沈んだ方向の空が深い群青に沈んでいく中を、日本海の水平線上にその存在を主張するように光を増し、列となって浮かび上がってくる漁り火。龍飛埼から見る夏の夕日は北海道松前町の沖合に沈むので、漁り火が並ぶ水平線上に松前町の町の灯が並びひと味違った灯りの競演となる。もう一つの漁り火は、龍飛埼より右側に広がる津軽海峡内で見られる漁り火である。崎から見下ろす目の前の海でイカ釣り漁船が灯りを煌々と点しているのである。

龍飛埼から東へ、三厩、今別、^{ほろつぎ}襲月海岸へと津軽海峡に面して道路が走る。この海岸線の道路では、どこからでも漁り火を手取るように見ることができる。

国道339号の三厩・龍飛間は「アワビ道路」とも呼ばれる。大正から昭和初期に、アワビ漁の収益金を使って13の洞門を穿って開通させたといい、小説『津軽』でも太宰が歩いたときの感慨が記述されている。

じつは、アワビ道路には並行する道路がある。青函トンネル掘削工事のための専用道路として



公団道路から見た三厩湾の漁り火。海ぎわを走る道路は国道339号。

山側に設置された道路で「公団道路」と呼ぶ人もいる。延長13kmの沿線を日本鉄道建設公団の工事関係者が植えたあじさいが咲き誇っている

るので、現地の案内表示では「あじさいロード」となっている。この道路はやや高いところにあるため海峡に展開する漁り火がよく見える。

五所川原から津軽半島の西側を北上してきた国道339号は今別で役目を終える。替わって国道280号が、今別からさらに海岸線を東に延びて銚釜崎、高野崎と津軽海峡の漁り火を眺める絶好のポイントをつないで蟹田、蓬田、油川を経て青森に至る。

津軽海峡で見る漁り火は、手が届きそうという表現がふさわしい。船の上にハロゲンライトを並べた姿が見えるのである。さらに近くで漁をしている場合は、それを眺める私の影が背後

の斜面に映っていることもあった。銚釜崎では、三厩湾に遊弋するイカ釣り船と龍飛、三厩の漁村の灯りが交ぜになって美しい光景を見ることができた。高野崎では、赤白のツートンカラーに塗られた灯台越しの近くの漁り火に加えて、遠く下北半島の大間崎付近に展開する漁り火も眺めることができた。



高野崎から見た三厩湾の漁り火。手前は婁月海岸。遙かに見える灯りは三厩から龍飛の海岸。

3. 茹でる人々

高野崎で漁り火を見て青森市に帰る途中、真っ暗闇の空間でウミネコたちが群がる灯りを見つけた。近づくると小さな小屋でご婦人が一人で作業していた。定置網で獲ったコウナゴを茹でるのだが、いろいろな大きさのコウナゴが混ざらないように大きなコウナゴを選び分けているところだった。コウナゴはイカナゴの稚魚のことで、足がはやく鮮魚では流通せず、シラス干し、釜揚げ、くぎ煮などとして出荷される。コウナゴとしては小さいほうが商品価値が高いそうだ。



コウナゴを選別している。大きいものをザルに選り分けている。小さいほうが商品価値が高い。

「コウナゴですか〜？」と話しかける

と、

「そうだよ～、いま茹でるから、あったかいところを食べさせてあげるよ～」と返ってきた。

ご夫婦で作業しているところだが、旦那さんの姿が見えない。

裸電球の下で、私の妻も加わり3人であれこれ話しているうちに、旦那さんが現れて沸騰した大釜に塩とコウナゴを放り込んで茹で始めた。黙々と、である。写真撮影の承諾を求めても軽く首を縦に振っただけで、黙々と茹で上がったコウナゴをザルに掬い上げていく。奥さんとは会話が途切れることはないのだが、旦那さんとは会話が生まれぬ。

奥さんが、茹で上がったコウナゴのザルを並べながら、

「ほら、食べて、美味しいよ～」と促してくれた。

茹でたてのコウナゴはくさみがなく柔らかくほど良い塩味がついてたいへん旨い。

これを乾燥させてシラス干しにすることなどを奥さんから聞いているうちに、作業を終えた旦那さんが片手にシラス干しを盛って私の妻の前に現れた。黙って差し出されたシラス干しを妻は両手で受けた。旦那さんが初めて声を出した。

「けっ！」

有名な津軽弁なので妻も理解はしたが、両手がふさがっている。

見かねて車からコンビニでもらったレジ袋を持ってきてシラス干しをその中に入れた。

シラス干しも食べてはみたが、茹でたばかりのアツアツのコウナゴとは勝負にならない。

「美味しいですね！」と言う妻の笑顔に答えようとする旦那さんの不器用な笑顔が可笑しかった。

おいとましようとする、旦那さんがレジ袋を妻の手から奪ってどこかへ行ってすぐ戻ってきた。

レジ袋はシラス干しで溢れていた。



大釜で茹で上がったコウナゴを掬い上げる。



茹でたコウナゴを乾燥させたシラス干し。

現地でしか味わえない浜茹での贅沢をいとも簡単に快く味あわせていただいたうえに、木訥で不器用な津軽男子の優しい心根に触れることができた。

青森県林政課が作った「里山の巨樹・古木マップ」に誘われて外ヶ浜町三厩宇鉄藤島にフジの古木を探しに行ったことがある。藤島集落のすぐ沖にある藤島から移植したといわれる樹齢 250 年のフジである。お目当てのフジの古木はすぐに見つかった。国道 339 号を藤島川沿いに折れたところで、山の斜面に小さな鳥居に覆い被さっているフジの木があった。フジの花が咲き誇ろうとする頃だったので、川の反対側の道路で「藤祭り」が催されていた。祭りといっても、道路上にゴザを敷き詰めて、真ん中に小さなマイクスタンドが立てられカラオケを楽しんでいるようだった。邪魔にならないように静かに車を停めて写真を撮っていると、一人のおばさんがこちら側に来て、「お酒を飲んでいきませんか？」と誘ってくださった。どこの馬の骨ともしれない、中年のオヤジを仲間に入れてくれようとする心遣いに感銘を受けたが、車で一人旅ゆえに丁重にご辞退申し上げた。お断りしてから、酒を飲まずに祭りを楽しめばいいんだと思ったが後の祭りである。

また、別の日にフジを見に行った時は、藤島川でフキを茹でて皮をむく人たちを見つけた。

溪流に腰を下ろして黙々と作業しておられたので、そばに行って話しかけてみた。聞くと、朝早くから山に入って採ってきたフキを茹でているとのことだった。昔はデンチを点けて暗いうちから出かけて行ったものだが、今では車で奥まで行けるので楽になったそうだ。デンチとは懐中電灯のことだと別の人が笑いなが



藤島川でフキを茹でる人たち。

ら説明してくれたのを聞いて、みんなで大笑いした。見ず知らずのちん入者を暖かく迎え入れてくれた。束にしたフキを茹でるためドラム缶を加工した釜を使っていた。湯がき終わったフキを一本一本丁寧に剥き、藤島川の清流に晒していた。清流にきらめく陽光がまぶしかった。

フキを茹でる光景に出会うのは実は二回目だ。前は下北半島の南の先端、脇野沢の九艘泊に行った時のことだ。

漁港の片隅の網干し小屋のあたりからもうもうと湯気が上がっていた。カメラを片手に訪ねると、タコを茹でる大釜でフキを茹でているところだった。おばさんばかり4名で賑やかに作業中だった。この時も、得体の知れないオヤジを愉快に迎え入れてくれた。



脇野沢九艘泊にて、タコを茹でる大釜でフキを茹でる人たち。

「どこから来たのか?」「どんな仕事をしてるのか?」「菓子を食わんか?」「歳はいくつだ?」「結婚してるか?」「住所を教えろ、フキを送ってやるよ!」などなど、矢継ぎ早な質問の最後は「嫁っこはいらんか?」と大変ありがたいお話までいただいた。

いずれも半島地域の自然と人の心の豊かさを心に刻んだ思い出である。

4. ハクチョウ

青森県内を移動していると「ハクチョウ飛来地」などという道路案内を見かける。冬、平内町の浅所海岸や藤崎町の平川に行けば確実にハクチョウを見ることができる。しかし、冬の間なら津軽平野の沼、川、排水路はもちろんのこと青森市街を流下する中小の河川など水面のあるところなら至る所でハクチョウの姿を見ることができる。



平内町浅所海岸白鳥飛来地にて

青森市の油川から蓬田村までの国道280号沿いに広がる水田地帯は、ハクチョウの自然な姿を見ることができる絶好のポイントだ。

初冬と晩冬、渡りの途中で羽を休めるハクチョウの群れも加わってハクチョウたちの色々な姿態を見ることができる。

早朝、国道280号線を車で走っていると、ラッパを吹くようなハクチ

ヨウの鳴き声に追い越された。時速 60 km 以上の速度で飛んでいることが実感できた。

このあたりの田んぼは津軽半島の脊梁山脈に向かって西に行くほど緩やかに標高が高くなっている。山ぎわの田んぼから見ると、南に八甲田の山塊が目に残る。その山塊から左に目をやると、東岳、夏泊半島、大島に連なり、陸奥湾の海面も視界に入れることができる。晴れた日には、遠く下北半島の釜臥山の美しい姿も見ることができる。

国道から農道に入って田んぼの中に停車していると、数羽のハクチョウの編隊が南や北へ向かって飛んで行く。東岳や夏泊半島の山並みを背景にしたハクチョウたちの優美な飛翔姿を見ていると飽きることがない。

時おり、私の頭のすぐ上をハクチョウたちが通り過ぎていく。よく見ると田んぼの中で一人立っている私の姿を認めて首を巡らせている者もいた。

稲を刈り取った田んぼで夜を過ごすハクチョウもいるようだが、近くの水辺で夜を明かしたハクチョウたちが夜明けとともに次々に田んぼに降り立って、落ち穂をついばんでいる。

有名な飛来地とは違って、ここでのハクチョウたちは私が近づいていくと頭を高く上げてこちらの行動を窺いながら遠ざかっていく。体を低くして田面の稲ワラや土に頭を突っ込み餌を漁っていたハクチョウが、立ち上がって慌てるようでもなく、



青森市後潟付近の国道 280 号沿いの水田から、東岳を背景に飛ぶ白鳥たちを眺める。



青森市後潟付近の国道 280 号沿いの水田から、陸奥湾大島と青函フェリーを見る。白鳥 2 羽が飛んでいる。



青森市後潟付近の水田にて、白鳥たちの飛翔を眺めていた。顔だけ私の方に向けて飛んでいる。



青森市後潟付近の水田にて、こちらの動きを窺いながら遠ざかっていく白鳥たち。

私との間合いを計ってトボトボと歩き始める姿はユーモラスだ。

春先にいち早く雪が溶けて湿地化した水田では、大勢のハクチョウたちがグッチョグッチョと音を立てている。皆一様に泥の中に顔を突っ込み、くちばしで餌を漉し取っているようである。北帰行に備えた最後の腹ごしらえのため、美しいハクチョウたちが泥でガングロになっている様は、春の兆しを感じさせるほのぼのとした光景であった。



青森市浪岡の水田にて、泥の中に顔を突っ込んでいた白鳥が顔を上げると、見事に泥で化粧されていた。

5. 平館の松並木

青森市から国道 280 号を北に行くと外ヶ浜町役場がある蟹田に至る。龍飛崎へ向かう多くの車はここから蟹田川沿いを西に向かってハンドルを切るが、私はそのまま海岸沿いの国道 280 号を北上する。山が海に迫って海岸線の道路に家屋が並んで張り付いている。漁村を串刺しにする路線では、海側に立ち並ぶ建物はホタテ養殖の作業小屋だ。貝の搬出用のベルトコンベヤーの横にパールネットが積み重ねられている。パールネットは貝を 10 個程入れて海中に垂らして養殖するためのカゴのことで、真珠養殖で使われていたカゴを流用したときの呼び名が今も使われているようだ。



外ヶ浜町平館にて、山に張り付いて並ぶ漁村の家屋。

やがて平館に入ると通過交通は農地の中を走るバイパスへ導かれるが、海沿いの旧道をゆっくり走ると、路村集落を抜け出たところは松並木になる。並木と言っても行儀良く樹木が並んでいるわけで



外ヶ浜町平館にて、津軽国定公園の黒松並木。

はない。黒松の細長い林の中を抜けていく道路といった風情である。「津軽国定公園」という表示に促されてじっくり見ると、「夫婦松」や「長寿の松」と記された巨樹古木もひっそりと息づいている。

「道の駅たいらだて」の海側に真っ白い平館灯台が姿を見せる。灯台は陸奥湾と津軽海峡を結ぶ平館海峡に面しており、対岸の下北半島の山並みが近くに見える。灯台の横にはホーン型の大きな霧笛が対岸に向かってメッセージを伝えようとするかのように佇んでいる。ただし、霧信号業務は昭和 61 年に廃止されている。しばらく平館海峡を眺めていると、北海道に向かうフェリーが下北半島寄りの航路を通っていった。



外ヶ浜町平館にて、平館灯台と霧笛のホーン。
右下は平館海峡を隔てた下北半島の山並み。

松並木の中に周辺とはやや趣が異なるところがある。2mほどの高さの土塁で囲まれた空間があり、土塁の上には松が生えている。江戸時代の末、弘前藩が沿岸防備のために築いた砲台の跡である。陸奥湾への入り口として最も狭くなった海峡部分は戦略上の要衝と考えられていたようだ。



外ヶ浜町平館にて、雪の砲台跡。
松の間から平館海峡が見えている。

6. 高野崎、鑄釜崎

津軽半島の北辺の海岸線は2つの出っ張りを形成している。西の出っ張りは有名な龍飛崎で、東の出っ張りが高野崎である。2つの出っ張りの間は緩やかな曲線を持った三厩湾と呼ばれている。平館を北上して津軽海峡に面した海岸線に来ると道路は海岸段丘の上を走る。段丘が海に面するところ



今別町高野崎にて、高野崎灯台と二つの太鼓橋。強い風と波が打ち寄せて太鼓橋がある海蝕台は白い波の下になっていた。

は崖を伴った複雑な海岸線になっている。

段丘上に広々とした駐車場を見つけて入ると、草地在海に向かって広がる高野崎キャンプ場だった。車を降りて草地在海に向かって歩くと、剥き出しの灯火を掲げる赤白に塗り分けられた小さめな高野崎灯台が姿を現す。左右の草地の端は柱状節理の垂直な急崖になっていて、岩場に寄せる波を見下ろすことができる。高野崎灯台から右に海へ向かって降りていくと、海面とほとんど同じ高さに広がる海蝕台の平坦面に二つの太鼓橋が架けられている。行き先に祠など認められないので釣り師たちの利便だろうか。荒い海岸の岩場に朱色の橋は場違いと思ったが、津軽海峡を吹き渡る強風で吹き寄せ打ち付ける波濤の中にしっかりと立っている橋の姿は最果ての地に立っていることの寂寥感を増幅する。

急崖の上にはハマナスの花が揺れている。海岸の岩場では、丈の低いスカシユリが節理の亀裂に根付いて、オレンジの花を咲かせていた。

地元の人に聞くと「昔は、袈月海岸では『錦石』が拾えたが、今はもう見つからない。」と言う。でも、運が良ければ今でも見つかるに違いない、と私は思っている。袈月海岸とは、高野崎から西の海岸をいうらしい。母の衣と書いて「ほろ」、「月」を合わせて「ほろづき」と読むこの名称は、どこか雅で優しげな場を連想させる。

この海岸でテングサを干しているところに出くわしたことがある。ご夫婦と思われる男女が、海藻のテングサを一つまみずつ海岸の玉砂利の上に丁寧に敷き詰めていた。獲ってきたばかりのテングサは濃いエンジ色をしているが、淡水をかけて晒しておくで脱色して白っぽくなっていくようだ。ここでは近くに水が得られないので天水頼りで脱色していくようだ。海岸に敷き詰められたテングサは何枚かの絨毯が敷き分けられているようにくっきりと色が違っている。1枚の絨毯は1日の作業量を表しているのだろう。



今別町袈月海岸にて、テングサ干し。獲ってきたテングサを丁寧に並べていく。向こうに行くほど脱色している。

袈月の漁村でも道路沿いの僅かなスペースでテングサを干していた。こちらでは、敷き並べたテングサにジョウロで水をかけていた。道路沿

いなので通りかかった人から度々声をかけられるそうだ。この場でテングサを買いトコロテンを自作してファンになり、毎年買いに来るリピーターもいるそうだ。

さらに西に走るとこぢんまりした駐車場と草地のキャンプ場が整備された鑄釜崎に着く。鑄釜崎には灯台はないが、頑丈一途なコンクリートで出来た升のような展望場がある。西側の眺めは、三厩湾を隔て、龍飛崎へ向かってなだらかに滑り落ちていく山並みを遠望することができる。東側は先ほど訪ねた高野崎の灯台がすぐ近くに見え、遙か向こうに下北の陸地の姿を認めることが出来る。



今別町鑄釜崎にて、頑丈一途なコンクリートの展望場。

鑄釜崎一带の海岸は全体に黒っぽい岩場になっていて、凝灰岩質の基質から尖った礫が顔を出しているのでゴツゴツして歩きにくい。こんな岩場にもツリガネニンジンが可憐な薄紫の花を咲かせている。厳しい環境で思いがけなく見かける野の花は魅力的だ。



今別町鑄釜崎にて、展望場の足下は打ち寄せる波で泡立っている。遠くの山影は右の方の龍飛崎で尽きている。

龍飛崎は風の岬として有名だが、鑄釜崎も津軽海峡を吹き抜けていく西風がまともに吹き付けるので、黒い岩場と真っ白に泡立つ波濤が強烈なコントラストを見せている。

強風に抗しながら足下の岩場を眺めているとき、頑丈一途な構造の展望場が頼もしく感じるものである。

7. 龍飛崎

「龍飛崎」と言うより「龍飛岬」と呼ぶ人が多いのではないだろうか？私も、石川さゆりが歌った『津軽海峡冬景色』の『♪ごらんあれが龍飛岬 北のはずれと 見知らぬ人が指をさす・・・♪』のフレーズが耳に馴染んでいたのも、「龍飛岬」という文字を探してみたが、見つかったのは「龍飛岬郵便局」と「龍飛岬観光案内所 龍飛館」の2つだけであった。

龍飛にかかわる表記には揺れが目立つのでここに記してみよう。「竜飛」と「龍飛」に、「埼」「崎」「碕」が組み合わせられ、さらに、これ

ら三つの「さき」の旁（つくり）が「竝」であるものがあり得る。

ちなみに、国土地理院発行の地形図での表記は「龍飛崎」であり、海上保安庁第二管区海上保安本部のホームページによると「龍飛崎（たっぴさき）」となっている。保安庁では「さき」の表記を「崎」で統一しているようだ。道路標識では「竜」が用いられている気がするが、全てチェックしたわけではない。本稿では国土地理院の表記に従っている。

私が見つけた最もレアな表記は「龍飛埼」だ。龍飛埼灯台に埋め込まれた味のある古い銘板に見つけた表記なので現地で探してみることをお勧めする。



龍飛埼灯台の初点灯の日付を記した銘板。

龍飛崎の先端の高台には海上自衛隊の通信施設がある。津軽海峡を隔てた対岸の北海道松前半島に向かって話しかけるような風情が感じられ、北辺の守りの要害に立っているという感慨で遠い地に来たのだという思いに包まれる。

標高 115m から見下ろす海面では、左の日本海から右の津軽海峡に向かって海水が流れ込んでいる。この海の流れは、潮汐による流れではなく、日本海を北上してきた対馬海流が津軽海峡に流れ込んでいる姿なので何時でも同じ方向に流れている。

遊歩道を海岸に降りてみると、海岸の岩に打ち寄せる波の音に混じって、大きな流量の川の傍らにいるような音も聞こえてくる。潮汐による潮の流れではなく、地球規模で遠く旅する海流を目の当たりに実感できる貴重なポイントだと思う。

灯台の横の駐車場に停車した大型バスから降り立った観光客は一目散に先端の高台に向かって歩いていく。崖下から吹き上げる風で着衣をばたつかせて対岸の北海道の山並みをカメラに納めようとも



龍飛崎の高台にて、海上自衛隊の通信施設。彼方に北海道松前半島の山並みが見えている。



龍飛崎の遊歩道にて、日本海側の岸近くを対馬海流が左から右に流れて行く。



龍飛崎の高台にて、風に吹かれる観光客。

がく姿はユーモラスである。

柵にもたれながらカメラを構える奥さんを後ろから足を踏ん張って支えるご主人の姿や、周りの雄大な景色はそっちのけで風に煽られる仲間の記念撮影に余念がない団体客の姿など、荒々しい自然現象を身体いっぱいでも楽しみに変えている逞しさがうかがえる。



龍飛崎の高台にて、風に煽られながら撮影する奥さんを支えるご主人。

初夏、龍飛崎一带は花が咲き誇っている。海岸の岩場にはスカシユリ、ハマボス、ハマフウロ、エゾオグルマやハマエンドウなど海浜性の野草が花咲かせている。

中でもニッコウキスゲはゴツゴツした崖の途中で黄色い花を咲かせて群生している姿に驚いた。ニッコウキスゲといえ、湿原や広い草原を埋め尽くす光景を紹介されることが多いので、黄色い花の群れが荒々しい海岸に面した岩崖の斜面で見られる光景はインパクトが強いものであった。



龍飛崎の海岸と灯台がある高台を結ぶ遊歩道。強風に吹かれながらニッコウキスゲが咲き誇っている。

龍飛崎の崖上の段丘面では、自然の野草以外にアジサイとチコリが多く見られる。青函トンネルを掘削した日本鉄道建設公団の関係者が植えたものと言われており、今でも道路や掘削斜面や盛土斜面の小段などで咲き続けている。

8. 相内の虫送り

津軽平野五所川原一带では田植後にサナブリ行事として虫送りがそれぞれの集落で行われる。岩木川が北流して海に注ぐ手前に広がる十三湖の北岸に相内集落がある。この集落で、虫送り行事が行われているところに遭遇した。

臨時駐車場という案内に従って車を置いて集落の中を太鼓と笛の音がする方へ歩いて



相内の虫送り行列。先頭は虫人形の山車。

ていった。

歩いているとすぐに不思議な雰囲気を感じた。酒のつまみに良さそうなものが並んだ小さなテーブルが家々の門先に、ちょこんと置かれている。一升瓶を持った優しげなご婦人に聞いてみると、虫送りの参加者を接待するという。菅笠に祭り装束の男がやってきて、思い思いの門先に座り込んで酒を注いでもらっている。見るとけっこう出来上がっているようだ。

虫送りは、送られる虫人形に続いて、荒馬と御者を先頭に、笛や太鼓の囃子方と太刀振りたちの行列が続く。虫人形の山車は集落のメインストリートを行くが、辻に来ると小休止している。この間に祭り装束の男たちは細い小路を跳ねて回り先述の供応接待を受けている。特に、笛や太鼓の囃子方は門先でひときわ勢いよく打ち鳴らすと、家人たちはますます念の入った接待をするようだ。女形のような菅笠姿の男衆が酒を煽る姿は、小さな子どもにとっては不気味に映る光景なのかもしれない。

道端でへたばっている荒馬に話しかけると、ペロリと舐めた人差し指で白い粉をぬぐい取り、私の鼻の頭に押しつけてきた。長方形の蒸し盆チヂミにソラマメほどの白いものが並べてある。白いものは米粉でできた団子で、鼻に塗ってもらうと福が来るのだそうだ。いきなり有り難いことをしていただいたものだ。

荒馬は集落のはずれまでくると、その先の橋を渡りたくないのを駄々をこねはじめ。動こうとしない荒馬と手綱を握った御者とのやりとりは、伝統に基づく振る舞いと酔っぱらいの酩酊姿のコラボレーションだ。勢い余って道沿いの田植えが終わったばかりの田んぼに入って泥水を掛け合うことに発展することもある



相内の虫送り。家の門先で酒を注いでもらう祭り装束の男と陰から窺う子ども。



相内の虫送り。米の粉の団子。鼻に塗ってもらうと福が来るそうだ。



相内の虫送り。駄々をこねて転倒する荒馬。



相内の虫送り。村はずれの神社に虫人形が晒し置かれる。右上の木に括りつけられている。

と聞いた。

村を見下ろす小高い森に鎮守の祠がささやかな佇まいで祀られていた。虫人形は村からよく見えるところに晒し置かれ、害虫が村の田んぼにやっこないように見張るようだ。

観光客のような人の姿はほとんど見かけなかったが、村を挙げての心のこもった行事だった。

9. 氷雪の十三湖

地吹雪に苦労してきた津軽の人と氷雪の魅力について話すのは難しい。

よそ者の好奇に満ちた眼差しは許し難いかもしれないが、雪面を走る雪煙を、雲間からの陽光が照らす様には神々しささえ感じざるを得ない。重々しい津軽の冬の晴れ間の光景はその場に身を置いた者だけが見られるすばらしいスペクタクルだ。

昭和 19 年に太宰治が中里から小泊に向かうバスの車窓から見た北津軽の風景を「旅人と会話をしない」「『風景』の一步手前のもの」と表現している。この感慨は 5 月の北津軽を見て書いたことになっているが、津軽で育った者の目線で、氷雪で覆われる冬の津軽の風景をも想起しながら書かれているのではないかと思われてならない。



地吹雪が走る冬の十三湖。広い雪面に葦が揺れる。

太宰治は 5 月の十三湖を「冷え冷えと白く目前に展開」し、「気品はあるがはかない感じ」で、「浅い真珠貝に水を盛ったよう」だと美しく描写した。

残念ながら、私は春夏秋にかけて十三湖の畔を何度か訪れたが、太宰の描写する美しい光景を感じる事が出来なかった。

冬に訪れたときには、低く垂れ込めた雪雲が強い季節風に千切れ、刹那に射しこむ陽光が雪原を走り、



冬の十三湖。薄氷に時おり陽光が射す。

湖畔一面を覆った葦原が地吹雪の中に浮かび上がって見えた。浅い真珠貝に盛った水を凍らせて、ハアと息を吹きかけたような光景だと感じた。

津軽半島の西側は、津軽平野の水田を日本海から守るように、南北に七里長浜と屏風山が走っている。鱒ヶ沢から北に伸びてきた屏風山が十三湖に阻まれる所に呑龍岳展望台がある。ここからは、見下ろす十三湖と日本海に突き出る小泊岬が一望できる。青森赴任の最後の冬にこの展望台を見つけた。夏の陽光の下で、十三湖をこの場所から見れば、太宰の描写した美しい真珠貝の姿を感じることができたのではないかと思うと残念である。



呑龍岳展望台から見た十三湖と小泊岬。

(注) 小説「津軽」原文は『やつぱり、北津軽だ。深浦などの風景に較べて、どこやら荒い。人の肌の匂いが無いのである。山の樹木も、いばらも、笹も、人間と全く無関係に生きている。東海岸の竜飛などに較べると、ずっと優しいけれど、でも、この辺の草木も、やはり「風景」の一步手前のもので、少しも旅人と会話をしない。やがて、十三湖が冷え冷えと白く目前に展開する。浅い真珠貝に水を盛ったような、気品はあるがはかない感じの湖である。』

10. あどはだり — もう一度行きたくなる津軽の風土 —

津軽半島エリアで心に残る情景は、他に、出来島の埋没林、ベンセ湿原、七ッ滝と傾り石の森林鉄道軌道痕、みちのく松陰道と算用師峠、竜泊ラインのヤマザクラと新緑と猿、津軽鉄道、川倉地蔵尊、高山稲荷とチェスボロー号遭難碑、ブナの新緑、ミズバショウ、大川平の荒馬、タチネブタ、雪の木守りんご、蟹田のしろうお漁、津軽平野の田んぼと岩木山などなど、枚挙にいとまがない。

津軽半島は、本州最北の地としての地位は下北半島に譲らざるを得ないが、半島地域の先端としての最果て感には勝るとも劣らない。

最果ての地の風景は、ややもすると太宰が言う「旅人と会話をしない」風景になりがちだ。津軽は広い水田地帯と豊かなヒバとブナの森林を擁している。長い歴史の中で人間の営みを受け入れてきた豊かな自然には、確かに人の匂いがするものである。

男たちは、集落の役目を誠実に勤め、祭りで陽気に大騒ぎをするが、日常生活では寡黙だ。反対に、女性は、日常では陽気で社交的だが、祭りでは男たちの無邪気な大騒ぎを優しく陰で支えてくれる。

厳しい自然の中で培われてきた津軽の人々の心根は津軽の風景の隅々にまで人の匂いを染み渡らせている。

撮り貯めた津軽の写真を見返しながら、こうして文章を綴っていると、もう一度行きたい場所が次々に浮かんでくる。

いやはや、なんとも、あどはだりのする……。



わたしの「津軽」紀行文

募集期間 平成21年6月1日～10月15日

応募者 55名

審査会 平成21年11月20日

審査員 櫛引 洋一（青森県近代文学館室長）

齋藤 三千政（弘前ペンクラブ会長）

星野 富一郎（「北狄」同人）

米田 省三（青森県近代文学館評議員）

三上 洋輝（青森県商工労働部新幹線交流推進課）

写真提供 弘前市、五所川原市、外ヶ浜町、今別町、深浦町、中泊町

わたしの「津軽」～優秀作品集～

平成22年2月発行

発行／青森県東青地域県民局地域連携部
青森県青森市新町二丁目4-30
電話：017-734-9412

<http://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kenmin/hi-renkei/>

この冊子は、青森県観光情報ホームページ（アプティ・ネット）
<http://apti.net.pref.aomori.jp/>からダウンロードできます。



平成 22 年 2 月

青森県東青地域県民局地域連携部